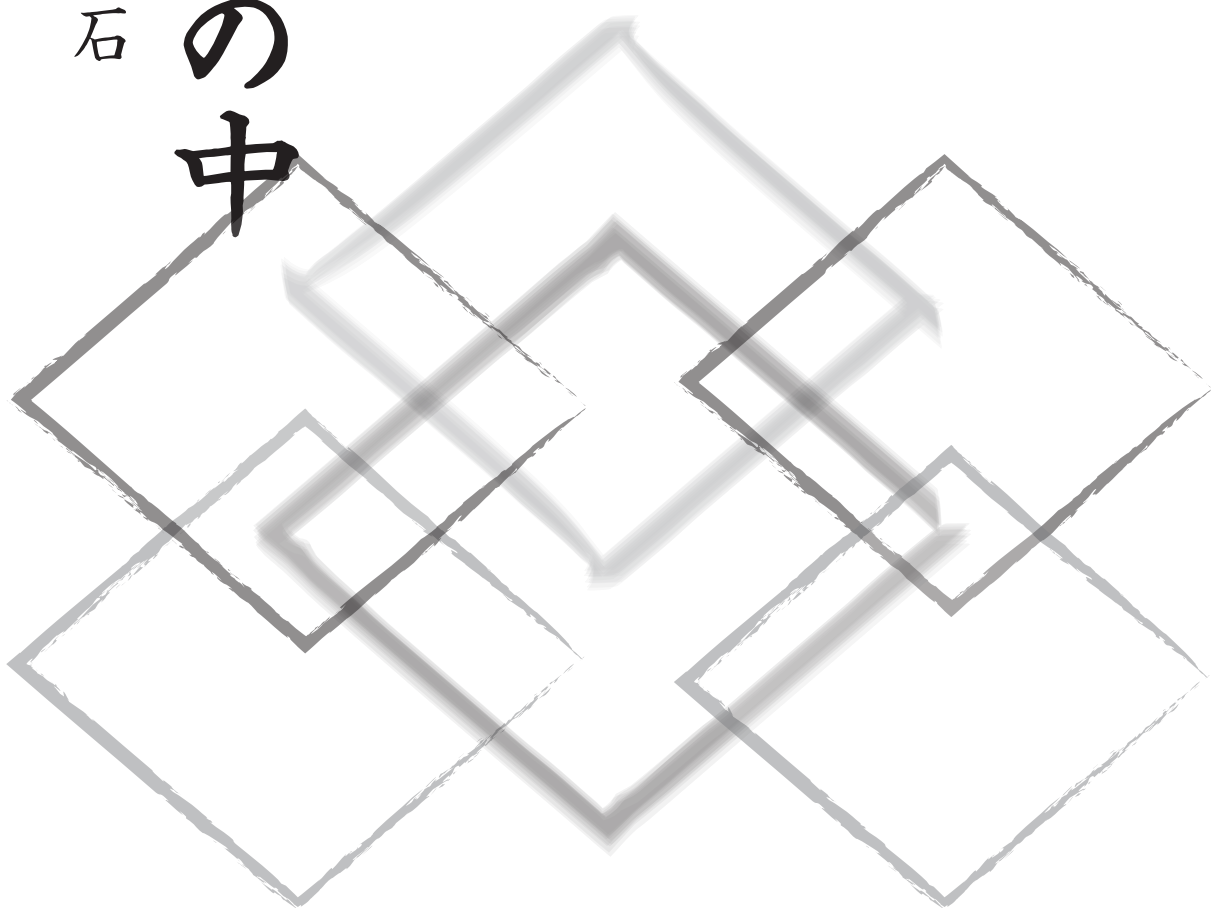


硝子戸の中

夏目漱石



一冊堂青空文庫

硝子戸の中

夏目漱石

一

硝子戸ガラスどの中うちから外を見渡すと、霜除しもよけをした芭蕉ばしやうだの、赤い実みの結なつた梅もどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのがすぐ眼に着くが、その他にこれと云って数え立てるほどのものはほとんど視線に入つて来こない。書齋にいる私の眼界は極きわめて単調でそうしてまた極めて狭いのである。

その上私は去年の暮から風邪かぜを引いてほとんど表へ出ずに、毎日こ

の硝子戸の中にばかり坐^{すわ}っているので、世間の様子はちつとも分らない。心持が悪いから読書もあまりしない。私はただ坐ったり寝たりしてその日その日を送っているだけである。

しかし私の頭は時々動く。気分も多少は変る。いくら狭い世界の中でも狭いなりに事件が起つて来る。それから小さい私と広い世の中とを隔離しているこの硝子戸の中へ、時々人が入^くって来る。それがまた私にとっては思いがけない人で、私の思いがけない事を云^しったり為^したりする。私は興味に充^みちた眼をもつてそれらの人を迎えたり送ったりした事さえある。

私はそんなものを少し書きつづけて見ようかと思う。私はそうした種類の文字^{もんじ}が、忙がしい人の眼に、どれほどつまらなく映るだろうか

と懸念^{けねん}している。私は電車の中でポケットから新聞を出して、大きな活字だけに眼を注^{そそ}いでいる購読者の前に、私の書くような閑散な文字を列^{なら}べて紙面をうずめて見せるのを恥ずかしいものの一つに考える。これらの人々は火事や、泥棒や、人殺しや、すべてその日その日の出来事のうちに、自分が重大と思う事件か、もしくは自分の神経を相当に刺戟^{しげき}し得る辛辣^{しんらつ}な記事のほかには、新聞を手取る必要を認めないくらい、時間に余裕をもたないのだから。――彼らは停留所で電車を待ち合わせる間に、新聞を買って、電車に乗っている間に、昨日^{きのう}起った社会の変化を知って、そうして役所か会社へ行き着くと同時に、ポケットに収めた新聞紙の事はまるで忘れてしまわなければならないほど忙がしいのだから。

私は今これほど切りつめられた時間しか自由にできない人達の軽蔑^{けいべつ}を冒^{おか}して書くのである。

去年から歐洲では大きな戦争が始まっている。そうしてその戦争がいつ済むとも見当^{けんとう}がつかない模様である。日本でもその戦争の一小部分を引き受けた。それが済むと今度は議会が解散になった。来るべき^{きた}総選挙は政治界の人々にとっての大切な問題になっている。米が安くなり過ぎた結果農家に金が入らないので、どこでも不景気だと零^{こぼ}している。年中行事で云えば、春の相撲^{すもう}が近くに始まろうとしている。要するに世の中は大変多事である。硝子戸の中にじっと坐っている私なぞはちよつと新聞に顔が出せないような気がする。私が書けば政治家や軍人や実業家や相撲狂^{すもうきやう}を押し退^おけて書く事になる。私だけではとて

もそれほどの胆力が出て来ない。ただ春に何か書いて見ろと云われたから、自分以外にあまり関係のないつまらぬ事を書くのである。それがいつまでつづくかは、私の筆の都合と、紙面の編輯の都合とでま
はつきり
るのだから、判然した見当は今つきかねる。

二

電話口へ呼び出されたから受話器を耳へあてがって用事を訊いて見ると、ある雑誌社の男が、私の写真を貰いたいのだが、いつ撮りに
もら
行って好いか都合を知らしてくれろというのである。私は「写真は少し困ります」と答えた。

私はこの雑誌とまるで関係をもっていなかった。それでも過去三四年の間にその一二冊を手にした記憶はあった。人の笑っている顔ばかりをたくさん載^のせるのがその特色だと思ったほかに、今は何にも頭に残っていない。けれどもそこにわざとらしく笑っている顔の多くが私に与えた不快の印象はいまだに消えずにいた。それで私は断^{こと}わろうとしたのである。

雑誌の男は、卯^う年の正月号だから卯^う年の人の顔を並べたいのだという希望を述べた。私は先方のいう通り卯^う年の生れに相違なかった。それで私はこう云った。――

「あなたの雑誌へ出すために撮^とる写真は笑わなくってはいけけないのでしよう」

「いえそんな事はありません」と相手はすぐ答えた。あたかも私が今までその雑誌の特色を誤解していたごとくに。

「当り前の顔で構いせんなら載せていただいても宜しゅうござい
す」

「いえそれで結構でございますから、どうぞ」

私は相手と期日の約束をした上、電話を切った。

なかいちにち

中一日おいて打ち合せをした時間に、電話をかけた男が、綺麗な洋

たずさ

服を着て写真機を携えて私の書斎に這入って来た。私はしばらくその

はい

人と彼の従事している雑誌について話をした。それから写真を二枚

撮って貰った。一枚は机の前に坐っている平生の姿、一枚は寒い庭前

にわさき

の霜の上に立っている普通の態度であつた。書斎は光線がよく透らな

とお

いので、機械を据えつけてからマグネシアを燃した。その火の燃える
すぐ前に、彼は顔を半分ばかり私の方へ出して、「御約束ではござい
ますが、少しどうか笑っていただけますまいか」と云った。私はその
時突然微かな滑稽を感じた。しかし同時に馬鹿な事をいう男だという
氣もした。私は「これで好いでしょう」と云ったなり先方の注文には
取り合わなかった。彼が私を庭の木立の前に立たして、レンズを私の
方へ向けた時もまた前と同じような鄭寧な調子で、「御約束ではござ
いますが、少しどうか……」と同じ言葉を繰り返した。私は前よりも
なお笑う氣になれなかった。

それから四日ばかり経つと、彼は郵便で私の写真を届けてくれた。
しかしその写真はまさしく彼の注文通りに笑っていたのである。その

時私は中が外れた人のように、しばらく自分の顔を見つめていた。私にはそれがどうしても手を入れて笑っているように拵えたものとしか見えなかったからである。

私は念のため家へ来る四五人のものにその写真を出して見せた。彼らはみんな私と同様に、どうも作って笑わせたものらしいという鑑定を下した。

私は生れてから今日までに、人の前で笑いたくもないのに笑って見せた経験が何度となくある。その偽りが今この写真師のために復讐を受けたのかも知れない。

彼は気味のよくない苦笑を洩らしている私の写真を送ってくれたけれども、その写真を載せると云った雑誌はついに届けなかった。

私がHさんからヘクトーを貰った時の事を考えると、もういつの間にか三四年の昔になっている。何だか夢のような心持もする。

その時彼はまだ乳離れのしたばかりの小供であつた。Hさんの御弟子は彼を風呂敷に包んで電車に載せて宅まで連れて来てくれた。私はその夜彼を裏の物置の隅に寝かした。寒くないように藁を敷いて、できるだけ居心地の好い寢床を拵えてやったあと、私は物置の戸を締めた。すると彼は宵の口から泣き出した。夜中には物置の戸を爪で掻き破って外へ出ようとした。彼は暗い所にたったひとり寝るのが淋しかったのだらう、翌る朝までまんじりともしない様子であつた。

この不安は次の晩もつづいた。その次の晩もつづいた。私は一週間余りかかって、彼が与えられた藁の上によく安らかに眠るようになるまで、彼の事が夜^{よる}になると必ず気にかかった。

私の小供は彼を珍らしがって、間^まがな隙^{すき}がな玩弄物^{おもちゃ}にした。けれども名がないのでついに彼を呼ぶ事ができなかった。ところが生きたものを相手にする彼らには、是非とも先方の名を呼んで遊ぶ必要があった。それで彼らは私に向って犬に名を命^つけてくれとせがみ出した。私はとうとうヘクトーという偉い名を、この小供達の朋友^{ほうゆう}に与えた。

それはイリアッドに出てくるトロイ一の勇将の名前であった。トロイと希臘^{ギリシヤ}と戦争をした時、ヘクトーはついにアキリスのために打たれた。アキリスはヘクトーに殺された自分の友達の讐^{かたき}を取ったのである。

る。アキリスが怒^{いか}って希臘方^{がた}から躍^{おど}り出した時に、城の中に逃げ込まなかつたものはヘクトー一人であつた。ヘクトーは三たびトロイの城壁をめぐつてアキリスの鋒先^{ほこさき}を避けた。アキリスも三たびトロイの城壁をめぐつてその後^{あと}を追いかけた。そうしてしまいにとうとうヘクトーを槍^{やり}で突き殺した。それから彼の死骸^{しがい}を自分の軍車^{チヤリオット}に縛^{しば}りつけてまたトロイの城壁を三度引^ひき摺^ずり廻した。……

私はこの偉大な名を、風呂敷包にして持って来た小さい犬に与えたのである。何にも知らないはずの宅^{うち}の小供も、始めは変な名だなあと云っていた。しかしじきに慣れた。犬もヘクトーと呼ばれるたびに、嬉^{うれ}しそうに尾を振った。しまいにはさすがの名もジョンとかジョージとかいう平凡な耶蘇教信者^{ヤソキョウシンジャ}の名前と一様に、毫^{ごう}も古典^{クラシカル}的な響を私に与

えなくなつた。同時に彼はしだいに宅のものから元^{もと}ほど珍重されないようになつた。

ヘクトーは多くの犬がたいてい罹^{かか}るジステンパーという病気のために一時入院した事がある。その時は子供がよく見舞^{みまい}に行つた。私も見舞に行つた。私の行つた時、彼はさも嬉しそうに尾を振つて、懐^{なつ}かしい眼を私の上に向けた。私はしゃがんで私の顔を彼の傍^{そば}へ持つて行つて、右の手で彼の頭を撫^なでてやつた。彼はその返礼に私の顔を所^{ところ}嫌^{きら}わず舐^なめようとしてやまなかつた。その時彼は私の見ている前で、始めて医者^{すず}の勧^{すす}める小量の牛乳を呑^のんだ。それまで首を傾^{かし}げていた医者も、この分ならあるいは癒^{なお}るかも知れないと云つた。ヘクトーははたして癒^{うち}つた。そうして宅^{うち}へ歸つて来て、元氣に飛び廻つた。

四

日ならずして、彼は二三の友達を^{こしら}えた。その中で最も親しかったのはすぐ前の医者キリストきようとの宅にいる彼と同年輩ぐらいの悪戯者いたずらものであつた。これは基督教徒に相応しいジョンという名前を持っていたが、その性質は異端者いたんしゃのヘクトーよりも遙はるかに劣っていたようである。むやみに人に噛みつく癖くせがあるので、しまいにはとうとう打ち殺ころされてしまった。

彼はこの悪友を自分の庭に引き入れて勝手な狼藉ろうぜきを働らいて私を困らせた。彼らはしきりに樹の根を掘って用もないのに大きな穴を開あけて喜んだ。綺麗な草花の上にわざと寝転ねころんで、花も茎も容赦ようしゃなく散らしたり、倒したりした。

ジョンが殺されてから、無聊ぶりような彼は夜遊よあそび昼遊ひなたびを覚えるようになった。散歩などに出かける時、私はよく交番そばの傍そばに日向ひなたぼっこをしている彼を見る事があつた。それでも宅にさえいれば、よくうさん臭いものに吠ほえついて見せた。そのうちで最も猛烈に彼の攻撃を受けたのは、本所辺から来る十歳とおばかりになる角兵衛獅子かくべえじしの子であつた。この子はいつでも「今日こんちは御祝い」と云つて入つて来る。そうして家うちの者から、麵パン麩パフの皮と一銭銅貨を貰わないうちは帰らない事に一人できめていた。だからヘクトーがいくら吠えても逃げ出さなかつた。かえってヘクトーの方が、吠えながら尻尾しっぽを股またの間に挟はさんで物置の方へ退却するのが例になつていた。要するにヘクトーは弱虫であつた。そうして操行からいうと、ほとんど野良犬のらいぬと扱えらぶところのないほどに墮

落していた。それでも彼らに共通な人懐ひとなつつこい愛情はいつまでも失わずにいた。時々顔を見合せると、彼は必ず尾を掉ふって私に飛びついて来た。あるいは彼の背を遠慮なく私の身体からだに擦すりつけた。私は彼の泥足のために、衣服や外套がいとうを汚よごした事が何度あるか分らない。

去年の夏から秋へかけて病氣をした私は、一カ月ばかりの間あいだついにヘクトーに会う機会を得ずに過ぎた。病やまいがようやく愈おこたって、床とこの外へ出られるようになってから、私は始めて茶の間の縁えんに立って彼の姿を宵闇よいやみの裡うちに認めた。私はすぐ彼の名を呼んだ。しかし生垣いけがきの根にじつとうずくまっている彼は、いくら呼んでも少しも私の情けなさに応じなかった。彼は首も動かさず、尾も振らず、ただ白かたまりい塊のまま垣根にこびりついてるだけであった。私は一カ月ばかり会わないうちに、彼が

もう主人の声を忘れてしまったものと思つて、微かすかな哀愁あいしゅうを感じずに
はいられなかった。

まだ秋の始めなので、どこの間の雨戸まも締められずに、星の光が明
け放たれた家の中からよく見られる晩であつた。私の立っていた茶の
間の縁には、家のものが二三人いた。けれども私がヘクトーの名前を
呼んでも彼らはふり向きもしなかった。私がヘクトーに忘れられたご
とくに、彼らもまたヘクトーの事をまるで念頭に置いていないように
思われた。

私は黙つて座敷へ歸つて、そこに敷いてある布団ふとんの上に横になつ
た。病後の私は季節に不相当な黒八丈の襟くろはちじょう えりのかかった銘仙めいせんのどてらを
着ていた。私はそれを脱ぐのが面倒だから、そのまま仰向あおむけに寝て、手

を胸の上で組み合せたなり黙って天井を見つめていた。

五

翌朝書齋の縁に立つて、初秋の庭の面を見渡した時、私は偶然また彼の白い姿を苔の上に認めた。私は昨夕の失望を繰り返すのが厭さに、わざと彼の名を呼ばなかった。けれども立ったなりじつと彼の様子を見守らずにはいられなかった。彼は立木の根方に据えつけた石の手水鉢の中に首を突き込んで、そこに溜っている雨水をぴちゃぴちゃ飲んでいた。

この手水鉢はいつ誰が持って来たとも知れず、裏庭の隅に転がって

いたのを、引越した当時植木屋に命じて今の位置に移させた六角形の
もので、その頃は苔が一面に生えて、側面に刻みつけた文字も全く読
めないようになっていた。しかし私には移す前一度判然とそれを読ん
だ記憶があつた。そうしてその記憶が文字として頭に残らないで、変
な感情としていまだに胸の中を往来していた。そこには寺と仏と無常
の匂が漂においただよっていた。

ヘクトーは元氣なさそうに尻尾しっぽを垂れて、私の方へ背中を向けてい
た。手水鉢を離れた時、私は彼の口から流れる垂涎よだれを見た。

「どうかしてやらないといけない。病気だから」と云つて、私は看護
婦かえりを顧みた。私はその時まだ看護婦を使つていたのである。

私は次の日も木賊とくさの中に寝ている彼を一目見た。そうして同じ言葉

を看護婦に繰り返した。しかしヘクトーはそれ以来姿を隠したぎり再び宅へ歸つて来なかつた。

「医者へ連れて行こうと思つて、探したけれどもどこにもおりません」

家のものはこう云つて私の顔を見た。私は黙つていた。しかし腹の中では彼を貰い受けた当時の事さえ思い起された。届書を出す時、種類という下へ混血児と書いたり、色という字の下へ赤斑と書いた滑稽も微かに胸に浮んだ。

彼がいなくなつて約一週間も経つたと思う頃、一二丁隔つたある人の家から下女が使に來た。その人の庭にある池の中に犬の死骸が浮いているから引き上げて頸輪を改ためて見ると、私の家の名前が彫りつ

けてあつたので、知らせに来たというのである。下女は「こちらで埋めておきましようか」と尋ねた。私はすぐ車夫くるまやをやつて彼を引き取らせた。

私は下女をわざわざ寄こしてくれた宅うちがどこにあるか知らなかった。ただ私の小供の時分から覚えている古い寺の傍そばだろうとばかり考えていた。それは山鹿やまが素行の墓のある寺で、山門の手前に、旧幕時代の記念のように、古い榎えのきが一本立っているのが、私の書斎の北の縁から数多あまたの屋根を越してよく見えた。

車夫は筵むしろの中にヘクトーの死骸を包くるんで帰つて来た。私はわざとそれに近づかなかつた。白木しらきの小さい墓標を買つて来こさして、それへ「秋風の聞えぬ土に埋うめてやりぬ」という一句を書いた。私はそれを

家のものに渡して、ヘクトーの眠っている土の上に建てさせた。彼の墓は猫の墓から東北に当って、ほぼ一間ばかり離れているが、私の書斎の、寒い日の照らない北側の縁に出て、硝子戸のうちから、霜に荒された裏庭を覗くと、二つともよく見える。もう薄黒く朽ちかけた猫のに比べると、ヘクトーのはまだ生々しく光っている。しかし間もなく二つとも同じ色に古びて、同じく人の眼につかなくなるだろう。

六

私はその女に前後四五回会った。

始めて訪ねられた時私は留守であつた。取次のものが紹介状を持つ

て来るように注意したら、彼女は別にそんなものを貰う所がないと
いつて帰って行つたそうである。

それから一日ほど経^たつて、女は手紙で直接^{じか}に私の都合を聞き合せに
来た。その手紙の封筒から、私は女がつい眼と鼻の間に住んでいる事
を知つた。私はすぐ返事を書いて面会日を指定してやつた。

女は約束の時間を違^{たが}えず来た。三^みつ柏^{かしわ}の紋^{もん}のついた派出^{はで}な色の縮緬^{ちりめん}
の羽織を着ているのが、一番先に私の眼に映つた。女は私の書いたも
のをたいてい読んでいるらしかった。それで話は多くそちらの方面へ
ばかり延びて行つた。しかし自分の著作^{しよけん}について初見^{しよけん}の人から賛辞^{さんじ}ば
かり受けているのは、ありがたいようではなはだこそばゆいものであ
る。実をいうと私は辟易^{へきえき}した。

一週間おいて女は再び来た。そうして私の作物さくぶつをまた賞ほめてくれた。けれども私の心はむしろそういう話題を避けたがっていた。三度目に来た時、女は何かに感激したものと見えて、袂たもとから手帛ハンケチを出して、しきりに涙を拭ぬぐった。そうして私に自分のこれまで経過して来た悲しい歴史を書いてくれないかと頼んだ。しかしその話を聴かない私には何という返事も与えられなかった。私は女に向つて、よし書くにしたところで迷惑を感じる人が出て来はしないかと訊きいて見た。女は存外判然はつきりした口調で、実名じつみょうさえ出さなければ構わないと答えた。それで私はとにかく彼女の経歴を聴きくために、とくに時間を拵こしらへた。

するとその日になつて、女は私に会いたいという別の女の人を連れて来て、例の話はこの次に延ばして貰もらいたいと云った。私には固もとより

彼女の違約を責める気はなかった。二人を相手に世間話をして別れた。

彼女が最後に私の書斎に坐^{すわ}ったのはその次の日の晩であった。彼女は自分の前に置かれた桐^{きり}の手焙^{てあぶり}の灰を、真鍮^{しんちゅう}の火箸^{ひばし}で突ツつきながら、悲しい身の上話を始める前、黙っている私にこう云った。

「この間は昂奮^{こうふん}して私の事を書いていただきたいように申し上げましたが、それは止^やめに致します。ただ先生に聞いていただくだけにしておきますから、どうかそのおつもりで……」

私はそれに対してこう答えた。

「あなたの許諾を得ない以上は、たといどんなに書きたい事柄^{ことがら}が出て来てもけっして書く気遣^{きづかい}はありませんから御安心なさい」

私が充分な保証を女に与えたので、女はそれではと云つて、彼女の七八年前からの経歴を話し始めた。私は默然^{もくねん}として女の顔を見守つていた。しかし女は多く眼を伏せて火鉢^{ひばち}の中ばかり眺めていた。そうして綺麗^{きれい}な指で、真鍮の火箸を握つては、灰の中へ突き刺した。

時々腑^ふに落ちないところが出てくると、私は女に向つて短かい質問をかけた。女は単簡^{たんかん}にまた私の納得^{なつとく}できるように答をした。しかしたいていは自分一人で口を利^きいていたので、私はむしろ木像のようにじつとしているだけであつた。

やがて女の頬は熱^{ほて}つて赤くなつた。白粉^{おしろい}をつけていないせいか、その熱つた頬の色が著るしく私の眼に着いた。俯向^{うつむき}になつていたので、たくさんある黒い髪の毛も自然私の注意を惹^ひく種になつた。

七

女の告白は聴いている私を息苦しくしたくらいに悲痛を極めたものであった。彼女は私に向ってこんな質問をかけた。――

「もし先生が小説を御書きになる場合には、その女の始末をどうなさいますか」

私は返答に窮した。

「女の死ぬ方がいいと御思いになりますか、それとも生きているように御書きになりますか」

私はどちらにでも書けると答えて、暗に女の気色をうかがった。女はもつと判然した挨拶を私から要求するように見えた。私は仕方なし

にこう答えた。――

「生きるという事を人間の中心点として考えれば、そのままにしていさしつかえて差支ないでしょう。しかし美しくいものや気け高いものを一義において人間を評価すれば、問題が違って来るかも知れません」

「先生はどちらを御お扱えびになりますか」

私はまた躊躇ちゆうちよした。黙って女のいう事を聞いているよりほかに仕方がなかった。

「私は今持っているこの美しい心持が、時間というもののためにだんだん薄れて行くのが怖こわくってたまらないのです。この記憶が消えてしまつて、ただ漫然と魂の抜殻ぬけがらのように生きている未来を想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくってたまらないのです」

私は女が今広い世間せかいの中にたった一人立って、一寸いっすんも身動きのできない位置にいる事を知っていた。そうしてそれが私の力でどうする訳にも行かないほどに、せっぱつまった境遇である事も知っていた。私は手のつけようのない人の苦痛を傍観する位置に立たせられてじっとしていた。

私は服薬の時間を計るため、客の前も憚はばからず常に袂時計たもとどけいを座蒲団ざぶとんの傍わきに置く癖くせをもっていた。

「もう十一時だから御帰りなさい」と私はしまいに女に云った。女は厭いやな顔もせずに立ち上った。私はまた「夜が更ふけたから送って行つて上げましょう」と云って、女と共に沓脱くつぬぎに下りた。

その時美しい月が静かな夜よを残る隈くまなく照らしていた。往来へ出

ると、ひっそりした土の上にひびく下駄げたの音はまるで聞こえなかった。私は懷手ふところをしたまま帽子も被かぶらずに、女の後あとに跟ついて行つた。曲り角の所で女はちよつと会釈えしやくして、「先生に送っていただいてはもつたいのうございます」と云つた。「もつたない訳がありません。同じ人間です」と私は答えた。

次の曲り角へ来たとき女は「先生に送っていただくのは光栄でございます」とまた云つた。私は「本当に光栄と思いますか」と真面目まじめに尋ねた。女は簡単に「思います」とはつきり答えた。私は「そんなら死なずに生きていらっしゃい」と云つた。私は女がこの言葉をどう解釈したか知らない。私はそれから一丁ばかり行つて、また宅うちの方へ引き返したのである。

むせつぽいような苦しい話を聞かされた私は、その夜かえって人間らしい好い心持を久しぶりに経験した。そうしてそれが尊たつとい文芸上の作物さくぶつを読んだあとの気分と同じものだという事に気がついた。有楽座や帝劇へ行つて得意になっていた自分の過去の影法師が何となく浅ましく感ぜられた。

八

不愉快に充みちた人生をとぼとぼたじ辿りつつある私は、自分のいつか一度到着しなければならぬ死という境地について常に考えている。そうしてその死というものを生よりは楽なものだとばかり信じている。

ある時はそれを人間として達し得る最上至高の状態だと思ふ事もある。

「死は生よりも尊たつとい」

こういう言葉が近頃では絶えず私の胸を往来おうらいするようになった。

しかし現在の私は今まのあたりに生きている。私の父ふ母ぼ、私の祖父そふ母ぼ、私の曾祖そうそふ父母ぼ、それから順次に溯さかのぼって、百年、二百年、乃至ないし千年万年の間に馴致じゅんちされた習慣を、私一代で解脱げだつする事ができないので、私は依然としてこの生に執着しているのである。

だから私の他ひとに与える助言じょごんはどうしてもこの生の許す範囲内においてしなければすまないように思う。どういう風に生きて行くかという狭い区域のなかでばかり、私は人類の一人いちにんとして他の人類の一人に向

わなければならぬと思う。すでに生の中に活動する自分を認め、またその生の中に呼吸する他人を認める以上は、互いの根本義はいかに苦しくてもいかに醜くてもこの生の上に置かれたものと解釈するのが当り前であるから。

「もし生きているのが苦痛なら死んだら好いでしょう」

こうした言葉は、どんなに情なく世を観ずる人の口からも聞き得ないだろう。医者などは安らかな眠に赴おもむこうとする病人に、わざと注射の針を立てて、患者の苦痛を一刻でも延ばす工夫を凝こらしている。こんな拷問ごうもんに近い所作しよさが、人間の徳義として許されているのを見ても、いかに根強く我々が生の一字に執着しゅうちやくしているかが解る。私はついにその人に死をすすめる事ができなかった。

その人はとても回復の見込みのつかないほど深く自分の胸を傷けられていた。同時にその傷が普通の人の経験にないような美しい思い出の種となつてその人の面を輝やかしていた。

彼女はその美しいものを宝石のごとく大事に永久彼女の胸の奥に抱き締めていたがった。不幸にして、その美しいものはとりも直さず彼女を死以上に苦しめる手傷そのものであつた。二つの物は紙の裏表のごとくとうてい引き離せないのである。

私は彼女に向つて、すべてを癒す「時」の流れに従つて下れと云つた。彼女はもしそうしたらこの大切な記憶がしだいに剥げて行くだろうと嘆いた。

公平な「時」は大事な宝物を彼女の手から奪う代りに、その傷口も

しだいに療治してくれるのである。烈はげしい生の歡喜を夢のように暈ぼかしてしまふと同時に、今の歡喜に伴なう生々なまなましい苦痛も取り除とける手段を怠おこたらないのである。

私は深い戀愛に根ざしている熱烈な記憶を取り上げても、彼女の創きず口ぐちから滴したたる血潮を「時」に拭ぬぐわしめようとした。いくら平凡でも生きて行く方が死ぬよりも私から見た彼女には適當だったからである。

かくして常に生よりも死を尊たつといと信じている私の希望と助言は、ついにこの不愉快に充みちた生というものを超越する事ができなかつた。しかも私にはそれが実行上における自分を、凡庸ぼんような自然主義者として証しょうこ拠立てたように見えてならなかつた。私は今でも半信半疑の眼でじつと自分の心を眺めている。

私が高等学校にいた頃、比較的親しく交際つきあった友達の中に〇という人がいた。その時分からあまり多くの朋友ほうゆうを持たなかった私には、自然〇と往来ゆききを繁しげくするような傾向があつた。私はたいてい一週に一度くらいの割で彼を訪ねた。ある年の暑中休暇などには、毎日欠かさず真砂町まさごちように下宿している彼を誘つて、大川おおかわの水泳場まで行つた。

〇は東北の人だから、口の利き方かたに私などと違つた鈍どんでゆつたりした調子があつた。そうしてその調子がいかにもよく彼の性質を代表しているように思われた。何度となく彼と議論をした記憶のある私は、ついに彼の怒おこつたり激したりする顔を見る事ができずにしまった。私

はそれだけでも充分彼を敬愛に価する長者として認めていた。

彼の性質が鷹揚であるごとく、彼の頭脳も私よりは遙かに大きかった。彼は常に当時の私には、考えの及ばないような問題を一人で考えていた。彼は最初から理科へ入る目的をもっていながら、好んで哲学の書物などを繙いた。私はある時彼からスペンサーの第一原理という本を借りた事をいまだに忘れずにいる。

空の澄み切った秋日和などには、よく二人連れ立って、足の向く方へ勝手な話をしながら歩いて行つた。そうした場合には、往来へ堀越に差し出た樹の枝から、黄色に染まった小さい葉が、風もないのに、はらはらと散る景色をよく見た。それが偶然彼の眼に触れた時、彼は「あッ悟つた」と低い声で叫んだ事があつた。ただ秋の色の空に動く

のを美しくいと観ずるよりほかに能のない私には、彼の言葉が封じ込められた或秘密の符徴ふちようとして怪しい響を耳に伝えるばかりであつた。「悟りというものは妙なものだな」と彼はその後あとから平生のゆつたりした調子で独言ひとりごとのように説明した時も、私には一口の挨拶あいさつもできなかった。

彼は貧生であつた。大観おおがん音の傍そばに間借をして自炊じすいしていた頃には、よく干鮭からざけを焼いて佗わびしい食卓に私を着かせた。ある時は餅菓子もちがしの代りに煮豆を買つて来て、竹の皮のまま双方から突つつき合つた。

大学を卒業すると間もなく彼は地方の中学に赴任した。私は彼のためにに残念に思つた。しかし彼を知らない大学の先生には、それがむしろ当然と見えたかも知れない。彼自身は無論平氣であつた。そ

れから何年かの後に、たしか三年の契約で、支那のある学校の教師に雇われて行ったが、任期が充ちて帰るとすぐまた内地の中学校長になった。それも秋田から横手に遷されて、今では樺太の校長をしているのである。

去年上京したついでに久しぶりで私を訪ねてくれた時、取次のものから名刺を受取った私は、すぐその足で座敷へ行つて、いつもの通り客より先に席に着いていた。すると廊下伝に室の入口まで来た彼は、座蒲団の上にきちんと坐っている私の姿を見るや否や、「いやに澄ましているな」と云った。

その時向の言葉が終るか終わらないうちに「うん」という返事がいつか私の口を滑って出てしまった。どうして私の悪口を自分で肯定する

ようなこの挨拶が、それほど自然に、それほど雑作なく、それほど拘泥^だならず、するすると私の咽喉^{のど}を滑^{すべ}り越したものだろうか。私はその時透明な好い心持がした。

十

向い合つて座を占めたOと私とは、何より先に互の顔を見返して、そこにまだ昔^{むか}しのままの面影^{おもかげ}が、懐^{なつ}かしい夢の記念のように残っているのを認めた。しかしそれはあたかも古い心が新しい気分の中にぼんやり織り込まれていると同じ事で、薄暗く一面に霞^{かす}んでいた。恐ろしい「時」の威力に抵抗して、再びもとの姿に返る事は、二人にとって

もう不可能であつた。二人は別れてから今会うまでの間に挟はさまつてゐる過去という不思議なものを顧かえりみない訳に行かなかつた。

〇は昔し林檎りんごのように赤い頬と、人一倍大きな丸い眼と、それから女に適したほどふつくりした輪廓りんかくに包まれた顔をもっていた。今見てもやはり赤い頬と丸い眼と、同じく骨張らない輪廓の持主ではあるが、それが昔しとはどこか違つてゐる。

私は彼に私の口髭くちひげと揉もみ上げを見せた。彼はまた私のために自分の頭を撫なでて見せた。私のは白くなつて、彼のは薄く禿はげかかつてゐるのである。

「人間も樺太かばふとまで行けば、もう行く先はなかりうな」と私が調戯からかうと、彼は「まあそんなものだ」と答えて、私のまだ見た事のない樺太

の話をしていろいろして聞かせた。しかし私は今それをみんな忘れてしまった。夏は大変好い所だという事を覚えているだけである。

私は幾年ぶりかで、彼といっしょに表へ出た。彼はフロックの上へ、とんびのような外套がいとうをぶわぶわに着ていた。そうして電車の中で釣革つりかわにぶら下りながら、隠袋かくしから手帛ハンケチに包んだものを出して私に見せた。私は「なんだ」と訊きいた。彼は「栗饅頭くりまんじゅうだ」と答えた。栗饅頭は先刻さつき彼が私の宅うちにいた時に出した菓子であった。彼がいつの間に、それを手帛に包んだろうかと考えた時、私はちよつと驚かされた。

「あの栗饅頭を取つて来たのか」

「そうかも知れない」

彼は私の驚いた様子を馬鹿にするような調子でこう云つたなり、そ

の手帛ハンケチの包をまた隠袋かくしに収めてしまった。

我々はその晩帝劇へ行つた。私の手に入れた二枚の切符に北側から入れという注意が書いてあつたのを、つい間違えて、南側へ廻ろうとした時、彼は「そつちじゃないよ」と私に注意した。私はちよつと立ち留まつて考えた上、「なるほど方角は樺太かばふとの方が確たしかなようだ」と云いながら、また指定された入口の方へ引き返した。

彼は始めから帝劇を知っていると云っていた。しかし晩餐ばんさんを済ました後あとで、自分の席へ帰ろうとするとき、誰でもやる通り、二階と一階の扉ドアを間違えて、私から笑われた。

折々隠袋から金縁きんぶちの眼鏡めがねを出して、手に持った摺物すりものを読んで見る彼は、その眼鏡めがねを除はずさずに遠い舞台を平気で眺めていた。

「それは老眼鏡じゃないか。よくそれで遠い所が見えるね」

「なにチャブドーだ」

私にはこのチャブドーという意味が全く解らなかった。彼はそれを大差なしという支那語だと云って説明してくれた。

その夜の帰りに電車の中で私と別れたぎり、彼はまた遠い寒い日本の領地の北の端^{はす}れに行ってしまった。

私は彼を想^{おも}い出すたびに、達人^{たつじん}という彼の名を考える。するとその名がとくに彼のために天から与えられたような心持になる。そうしてその達人が雪と氷に鎖^とざされた北の果^{はて}に、まだ中学校長をしているのだなと思う。

ある奥さんがある女の人を私に紹介した。

「何か書いたものを見ていただきたいのだそうでございます」

私は奥さんのこの言葉から、頭の中でいろいろの事を考えさせられた。今まで私の所へ自分の書いたものを読^{いま}んでくれと云つて来たものは何人^いとなくある。その中には原稿紙の厚さで、一寸または二寸ぐらいの嵩^{かさ}になる大部のものも交っていた。それを私は時間の都合の許す限りなるべく読んだ。そうして簡単な私はただ読みさえすれば自分の頼まれた義務を果^{はた}したものと心得て満足していた。ところが先方では後から新聞に出してくれと云ったり、雑誌へ載せて貰^{もら}いたいと頼んだ

りするのが常であつた。中には他^{ひと}に読ませるのは手段で、原稿を金に換えるのが本来の目的であるように思われるのも少なくなかつた。私は知らない人の書いた読みにくい原稿を好意的に読むのがだんだん厭^{いや}になつて来た。

もつとも私の時間に教師をしていた頃から見ると、多少の弾力性ができてきたには相違なかつた。それでも自分の仕事にかかれば腹の中はずいぶん多忙であつた。親切^{れんじ}づくで見てやろうと約束した原稿すら、なかなか埒^{らち}のあかない場合もないとは限らなかつた。

私は私の頭で考えた通りの事をそのまま奥さんに話した。奥さんはよく私のいう意味を領解して帰つて行つた。約束の女が私の座敷へ来て、座蒲団^{ざぶたん}の上に坐つたのはそれから間もなくであつた。佗^わびしい雨

が今にも降り出しそうな暗い空を、硝子戸越ガラスどごしに眺めながら、私は女にこんな話をした。――

「これは社交ではありません。御互に体裁ていさいの好い事ばかり云い合つていては、いつまで経たつたつて、啓発されるはずも、利益を受ける訳もないのです。あなたは思い切つて正直にならなければ駄目だめですよ。自分さえ充分に開放して見せれば、今あなたがどこに立つてどっちを向いているかという實際が、私によく見えて来るのです。そうした時、私は始めてあなたを指導する資格を、あなたから与えられたものと自覚しても宜よろしいのです。だから私が何か云つたら、腹に答えべき或物を持つている以上、けっして黙つてはいけません。こんな事を云つたら笑われはしまいか、恥を搔かきはしまいか、または失礼だと

いって怒られはしまいかなどと遠慮して、相手に自分という正体を黒く塗り潰した所ばかり示す工夫をするならば、私がいくらあなたに利益を与えようと焦慮ても、私の射る矢はことごとく空矢になっあだやてしまっあせつうだけです。

「これは私のあなたに対する注文ですが、その代り私の方でもこの私というものを隠しは致しません。ありのままを曝け出さらすよりほかに、あなたを教える途みちはないのです。だから私の考えのどこかに隙すきがあつて、その隙をもしあなたから見破られたら、私はあなたに私の弱点を握られたという意味で敗北の結果に陥おちいるのです。教を受ける人だけが自分を開放する義務をもっていると思うのは間違っています。教える人も己おのれをあなたの前に打ち明けるのです。双方とも社交を離れて勘かん

破^ぱし合うのです。

「そういう訳で私はこれからあなたの書いたものを拝見する時に、ずいぶん手ひどい事を思い切つて云うかも知れませんが、しかし怒つてはいけません。あなたの感情を害するためにいうのではないのですから。その代りあなたの方でも腑^ふに落ちない所があつたらどこまでも切り込んでいらつしやい。あなたが私の主意を了解している以上、私はけつして怒るはずはありませんから。

「要するにこれはただ現状維持を目的として、上滑^{うわすべ}りな円滑を主位に置く社交とは全く別物なのです。解りましたか」

女は解つたと云つて歸つて行つた。

十二

私に短冊^{たんざく}を書けの、詩を書けのと云つて来る人がある。そうしてその短冊やら続^{ぬめ}やらをまだ承諾もしないうちに送つて来る。最初のうちはせつかくの希望を無にするのも気の毒だという考から、拙^{まず}い字とは思いながら、先方の云うなりになって書いていた。けれどもこうした好意は永続しにくいものと見えて、だんだん多くの人の依頼を無にするような傾向が強くなつて来た。

私はすべての人間を、毎日毎日恥を搔^かくために生れてきたものだとかえ考える事もあるのだから、変な字を他^{ひと}に送つてやるくらいの所作^{しよさ}は、あえてしようと思えば、やれないとも限らないのである。しかし

自分が病気の時、仕事の忙がしい時、またはそんな真似まねのしたくない時に、そういう注文が引き続いて起つてくると、実際弱らせられる。彼らの多くは全く私の知らない人で、そうして自分達の送った短冊を再び送り返すこちらの手数てすうさえ、まるで眼中に置いていないように見えるのだから。

そのうちで一番私を不愉快にしたのは播州ばんしゅうの坂越さごしにいる岩崎という人であつた。この人は数年前よく端書はがきで私に俳句を書いてくれと頼んで来たから、その都度つど向うのいう通り書いて送った記憶のある男である。その後の事のちであるが、彼はまた四角な薄い小包を私に送った。私はそれを開けるのさえ面倒だったから、ついそのままにして書斎へ放ほうり出だしておいたら、下女そうじが掃除そうじをする時、つい書物と書物の間へ挟はさみ

込んで、まず体よくしまい失くした姿にしてしまった。

この小包と前後して、名古屋から茶の缶が私宛で届いた。しかし誰が何のために送ったものかその意味は全く解らなかった。私は遠慮なくその茶を飲んでしまった。するとほどなく坂越の男から、富士登山の画を返してくれと云ってきた。彼からそんなものを貰った覚のない私は、打ちやっておいた。しかし彼は富士登山の画を返せ返せと三度も四度も催促してやまない。私はついにこの男の精神状態を疑い出した。「大方氣違おおかただろう。」私は心の中でこうきめたなり向うの催促にはいっさい取り合わない事にした。

それから二三カ月経たった。たしか夏の初の頃と記憶しているが、私はあまり乱雑に取り散らされた書斎の中に坐すわっているのがうつとうし

くなったので、一人でぼつぼつそこいらを片づけ始めた。その時書物の整理をするため、好い加減に積み重ねてある字引や参考書を、一冊ずつ改めて行くと、思いがけなく坂越の男が寄こした例の小包が出て来た。私は今まで忘れていたものを、眼まのあたり見て驚ろいた。さっそく封を解といて中を検しらべたら、小さく畳んだ画が一枚入っていた。それが富士登山の図だったので、私はまた吃驚びっくりした。

包のなかにはこの画のほかに手紙が一通添えてあつて、それに画の賛をしてくれという依頼と、御礼に茶を送るという文句が書いてあつた。私はいよいよ驚ろいた。

しかしその時の私はとうてい富士登山の図などに賛をする勇氣をもっていなかった。私の気分が、そんな事とは遙はるか懸かけ離れた所に

あつたので、その画に調和するような俳句を考えている暇がなかったのである。けれども私は恐縮した。私は丁寧な手紙を書いて、自分の怠慢を謝した。それから茶の御礼を云った。最後に富士登山の図を小包にして返した。

十三

私はこれで一段落ついたものと思つて、例の坂越の男の事を、それぎり念頭に置かなかつた。するとその男がまた短冊を封じて寄こした。そうして今度は義士に關係のある句を書いてくれというのである。私はそのうち書こうと云つてやった。しかしなかなか書く機会が

来なかったので、ついそのままになってしまった。けれども執濃しつこいこの男の方ではけっしてそのままに済ます気はなかったものと見えて、むやみに催促を始め出した。その催促は一週に一遍か、二週に一遍の割できつと来た。それが必ず端書はがきに限っていて、その書き出しには、必ず「拝啓失敬申し候えども」とあるにきまっていた。私はその人の端書を見るのがだんだん不愉快になって来た。

同時に向うの催促も、今まで私の予期していなかった変な特色を帯びるようになった。最初には茶をやったではないかという言葉が見えた。私がそれに取り合わずにいると、今度はあの茶を返してくれという文句に改たまった。私は返す事はたやすいが、その手数が面倒てかずだから、東京まで取りに来れば返してやると云ってやりたくなかった。けれ

ども坂越の男にそういう手紙を出すのは、自分の品格にかか関わるような
気がしてあえてし切れなかった。返事を受け取らない先方はなおの事
催促をした。茶を返さないならそれでも好いから、金一円をその代価
として送って寄せせというのである。私の感情はこの男に対してしだ
いに荒すさんで来た。しまいにはとうとう自分を忘れるようになった。茶
は飲んでしまった、短冊は失なくしてしまった、以来端書を寄こす事は
いっさい無用であると書いてやった。そうして心のうちで、非常に
苦にが々しい気分を経験した。こんな非紳士的な挨拶あいさつをしなければならな
いような穴の中へ、私を追い込んだのは、この坂越の男であると思っ
たからである。こんな男のために、品格にもせよ人格にもせよ、幾分
の墮落を忍ばなければならぬのかと考えると情なさけなかつたからであ

る。

しかし坂越の男は平氣であつた。茶は飲んでしまい、短冊は失く^なしてしまふとは、余りと申せば……とまた端書に書いて來た。そうしてその冒頭には依然として拝啓失敬申し候^{そうら}えどもという文句が規則通り繰り返されていた。

その時私はもうこの男には取り合ふまいと決心した。けれども私の決心は彼の態度に対して何の効果のあるはずはなかつた。彼は相變らず催促をやめなかつた。そうして今度は、もう一度書いてくれれば、また茶を送つてやるがどうだと云つて來た。それから事いやしくも義士に関するのだから、句を作つても好いだらうと云つて來た。

しばらく端書が中絶したと思うと、今度はそれが封書に變つた。

もつともその封筒は区役所などで使う極めて安い鼠色ねずみいろのものであったが、彼はわざとそれに切手を貼はらないのである。その代り裏に自分の姓名も書かずに投函とうかんしていた。私はそれがために、倍の郵税を二度ほど払わせられた。最後に私は配達夫に彼の氏名と住所とを教えて、封のまま先方へ逆送して貰った。彼はそれで六銭取られたせいか、ようやく催促を断念したらしい態度になった。

ところが二カ月ばかり経って、年が改まると共に、彼は私に普通の年始状を寄こした。それが私をちよつと感心させたので、私はつい短冊へ句を書いて送る気になった。しかしその贈物は彼を満足させるに足りなかった。彼は短冊が折れたとか、汚よごれたとか云つて、しきりに書き直しを請求してやまない。現に今年の正月にも、「失敬申し候え

ども……」という依頼状が七八日頃に届いた。

私がこんな人に出会ったのは生れて始めてである。

十四

ついこの間昔むかし私の家うちへ泥棒の入った時の話を比較的詳くわしく聞いた。

姉がまだ二人とも嫁かたづかず^にいた時分の事だというから、年代にすると、多分私の生れる前後に当るのだろう、何しろ勤王とか佐幕とかいう荒々しい言葉の流行はやったやかましい頃なのである。

ある夜一番目の姉が、夜中よなかに小用こように起きた後あと、手を洗うために、潜くぐ

戸りどを開けると、狭い中庭の隅すみに、壁を圧おしつけるような勢いきおいで立っている梅の古木の根方ねかたが、かっと明るく見えた。姉は思慮をめぐらす暇いとまもないうちに、すぐ潜戸を締めしてしまったが、締めたあとで、今日前に見た不思議な明るさをそこに立ちながら考えたのである。

私の幼心に映ったこの姉の顔は、いまだに思い起そうとすれば、いつでも眼の前に浮ぶくらい鮮あざやかである。しかしその幻像はすでに嫁に行つて齒を染めたあとの姿であるから、その時縁側えんがわに立つて考えていた娘盛りの彼女を、今胸のうちに描き出す事はちよつと困難である。

広い額、浅黒い皮膚、小さいけれども明確はつきりした輪廓りんかくを具えている鼻ひとなみ、人並より大きい二重瞼ふたえまぶちの眼、それから御沢おさわという優しい名、――私はただこれらを綜合そうごうして、その場合における姉の姿を想像するだけ

である。

しばらく立つたまま考えていた彼女の頭に、この時もしかすると火事じゃないかという懸念^{けねん}が起った。それで彼女は思い切つてまた切戸^{きりど}を開けて外を覗^{のぞ}こうとする途端^{とたん}に、一本の光る拔身^{ぬきみ}が、闇^{やみ}の中から、四角に切った潜戸の中へすうと出た。姉は驚いて身を後^{あと}へ退^ひいた。その隙^{ひま}に、覆面^{ふくめん}をした、龕灯^{がんどう}提灯^{ちようちん}を提げた男が、抜刀のまま、小さい潜戸^{うち}から大勢家の中へ入つて来たのだそうである。泥棒^{にんず}の人数はたしか八人とか聞いた。

彼らは、他^{ひと}を殺^{あや}めるために来たのではないから、おとなしくしていただくさえすれば、家のものに危害は加えない、その代り軍用金を借^かせと云つて、父に迫った。父はないと断った。しかし泥棒はなかなか

承知しなかった。今角かどの小倉屋こくらやという酒屋へ入って、そこで教えられて来たのだから、隠しても駄目だと云って動かなかった。父は不精無性ふしょうぶしやうに、とうとう何枚かの小判を彼らの前に並べた。彼らは金額があまり少な過ぎると思ったものか、それでもなかなか帰ろうとしないので、今まで床の中に寝ていた母が、「あなたの紙入に入っているのもやっておしまいなさい」と忠告した。その紙入の中には五十両ばかりあったとかいう話である。泥棒が出て行ったあとで、「余計な事をいう女だ」と云って、父は母を叱りつけたそうである。

その事があって以来、私の家では柱を切り組きくみにして、その中へあり金を隠す方法を講じたが、隠すほどの財産もできず、また黒装束くろそうぞくを着けた泥棒も、それぎり来ないので、私の生長する時分には、どれが切きり

組ぐみにしてある柱かまるで分らなくなっていた。

泥棒が出て行く時、「この家は大変うち締りしまの好い宅だ」と云って賞め
たそうだが、その締りの好い家を泥棒に教えた小倉屋の半兵衛さんの
頭には、あくる日から擦り傷かすきずがいくつとなくできた。これは金はない
ませんと断わるたびに、泥棒がそんなはずがあるものかと云っては、
拔身の先でちよいちよい半兵衛さんの頭を突ツついたからだという。
それでも半兵衛さんは、「どうしても宅うちにはありません、裏の夏目さ
んにはたくさんあるから、あすこへいらつしやい」と強情を張り通し
て、とうとう金は一文も奪とられずにしまった。

私はこの話を妻さいから聞いた。妻はまたそれを私の兄から茶受話ちやうけばなしに聞
いたのである。

十五

私が去年の十一月学習院で講演をしたら、薄謝と書いた紙包を後から届けてくれた。立派な水引が^{みずひき}かかっているので、それを除^{はず}して中を改めると、五円札が二枚入っていた。私はその金を平生から気の毒に思っていた、或懇意な芸術家に贈ろうかしらと思つて、暗^{あん}に彼の来るのを待ち受けていた。ところがその芸術家がまだ見えない先に、何か寄附の必要ができてきたりして、つい二枚とも消費してしまつた。

一口でいうと、この金は私にとってけつして無用なものではなかつたのである。世間の通り相場で、立派に私のために消費されたというよりほかに仕方がないのである。けれどもそれを他^{ひと}にやろうとまで

思った私の主観から見れば、そんなにありがたみの附着していない金には相違なかったのである。打ち明けた私の心持をいうと、こうした御礼を受けるより受けない時の方がよほど颯爽さつぱりしていた。

くろやなぎかいしゅう　ちよぎゅうかい
畔柳芥舟君が樗牛会の講演の事で見えた時、私は話のついでとして一通りその理由を述べた。

「この場合私は労力を売りに行つたのではない。好意づくで依頼に応じたのだから、向うでも好意だけで私に酬むくいたらよかろうと思う。もし報酬問題とする気なら、最初から御礼はいくらするが、来てくれるかどうかと相談すべきはずでしょう」

その時K君は納得なっとくできないといったような顔をした。そうしてこう答えた。

「しかしどうでしょう。その十円はあなたの労力を買ったという意味でなくって、あなたに対する感謝の意を表する一つの手段と見たら。

そう見る訳には行かないのですか」

「品物なら判然^{はつきり}そう解釈もできるのですが、不幸にも御礼が普通營業的の売買^{ばいばい}に使用する金なのですから、どっちとも取れるのです」

「どっちとも取れるなら、この際^{さい}善意の方に解釈した方が好くはないでしょうか」

私はもつともだとも思った。しかしまたこう答えた。

「私は御存じの通り原稿料で衣食しているくらいですから、無論富裕とは云えません。しかしどうかこうか、それだけで今日^{こんにち}を過ごして行かれるのです。だから自分の職業以外の事にかけては、なるべく好意

的に人のために働いてやりたいという考えを持っています。そうしてその好意が先方に通じるのが、私にとっては、何よりも尊たつとい報酬なのです。したがって金などを受けると、私が人のために働いてやるという余地、——今の私にはこの余地がまた極めて狭いのです。——その貴重な余地を腐蝕ふしょくさせられたような心持になります」

K君はまだ私の云う事を肯うけがわない様子であつた。私も強情であつた。

「もし岩崎とか三井とかいう大富豪に講演を頼むとした場合に、後から十円の御礼を持って行くでしょうか、あるいは失礼だからと云つて、ただ挨拶あいさつだけにとどめておくでしょうか。私の考ではおそらく金銭は持つて行くまいと思うのですが」

「さあ」といっただけでK君は判然した返事を与えなかった。私にはまだ云う事が少し残っていた。

「己惚おのぼれかは知りませんが、私の頭は三井岩崎に比べくらるほど富んでいないにしても、一般学生よりはずっと金持に違いないと信じています」
「そうですとも」とK君は首肯うなずいた。

「もし岩崎や三井に十円の御礼を持って行く事が失礼ならば、私の所へ十円の御礼を持って来るのも失礼でしょう。それもその十円が物質上私の生活に非常な潤沢うるおいを与えるなら、またほかの意味からこの問題を眺める事もできるでしょうが、現に私はそれを他ひとにやろうとまで思ったのだから。——私の現下の経済的生活は、この十円のために、ほとんど目に立つほどの影響を蒙こうむらないのだから」

「よく考えて見ましょう」といったK君はにやにや笑いながら帰って行った。

十六

宅の前のだらだら坂を下りると、一間ばかりの小川に渡した橋があつて、その橋向うのすぐ左側に、小さな床屋が見える。私はたった一度そこで髪を刈^かつて貰った事がある。

平生は白い金巾^{かなきん}の幕で、硝子戸^{ガラスど}の奥が、往来から見えないようにしてあるので、私はその床屋の土間に立って、鏡の前に座を占めるまで、亭主の顔をまるで知らずにいた。

亭主は私の入ってくるのを見ると、手に持った新聞紙を放り出して
すぐ挨拶をした。その時私はどうもどこかで会った事のある男に違な
いという気がしてならなかった。それで彼が私の後へ廻つて、鋏を
ちよきちよき鳴らし出した頃を見計らつて、こっちから話を持ちかけ
て見た。すると私の推察通り、彼は昔し寺町の郵便局の傍に店を持っ
て、今と同じように、散髪を渡世としていた事が解つた。

「高田の旦那などにもだいぶ御世話になりました」

その高田というのは私の従兄なのだから、私も驚いた。

「へえ高田を知ってるのかい」

「知ってるどころじゃございません。始終徳、徳、つて臙肩にして下
すつたもんです」

彼の言葉遣づかいはこういう職人にしてはむしろ丁寧ていねいな方であつた。

「高田も死んだよ」と私がいうと、彼は吃驚びっくりした調子で「ヘッ」と声を揚げた。

「いい旦那でしたがね、惜しい事に。いつ頃御亡ごおなくなりになりました」

「なに、つい此間こないださ。今日で二週間になるか、ならないぐらいのものだろう」

彼はそれからこの死んだ従兄いとこについて、いろいろ覚えていた事を私に語った末、「考えると早いもんですね旦那、つい昨日きのうの事としてきや思われないのに、もう三十年近くにもなるんですから」と云つた。

「あのそら求友亭きゆうゆうていの横町にいらしってね、……」と亭主はまた言葉を継ぎ足した。

「うん、あの二階のある家うちだろう」

「ええ御二階がありましたつけ。あすこへ御移りになった時なんか、方々様ほうぼうさまから御祝い物なんかあつて、大變御盛ごさかんでしたがね。それから後あとでしたつけか、行願寺ぎょうがんじの寺内じないへ御引越なすつたのは」

この質問は私にも答えられなかった。実はあまり古い事なので、私もつい忘れてしまったのである。

「あの寺内も今じゃ大變變つたようだね。用がないので、それからつい入って見た事もないが」

「變つたの變らないのつてあなた、今じゃまるで待合ばかりでさあ」

私は肴町さかなまちを通るたびに、その寺内へ入る足袋屋たびやの角の細い小路こうじの入口に、ごたごた掲かかげられた四角な軒灯の多いのを知っていた。しかしその数を勘定かんじょうして見るほどの道楽氣も起らなかったもので、つい亭主のいう事には氣がつかずにいた。

「なるほどそう云えば誰たが袖そでなんて看板が通りから見えるようだね」
「ええたくさんできましたよ。もっとも変わるはずですね、考えて見ると。もうやがて三十年にもなろうと云うんですから。旦那も御承知の通り、あの時分は芸者屋あずまやたら、寺内にたった一軒しきや無かつたもんでさあ。東家あずまやってね。ちようどそら高田の旦那まんむこの真向まむこでしたろう、東家の御神灯ごじんとうのぶら下がっていたのは」

十七

私はその東家をよく覚えていた。従兄いとこの宅うちのつい向むこうなので、両方のものが出入りではいのたびに、顔を合わせさえすれば挨拶あいさつをし合うぐらいの間柄あいだがらであつたから。

その頃従兄の家には、私の二番目の兄がごろごろしていた。この兄は大の放蕩ほうとうもので、よく宅の懸物かけものや刀剣類を盗み出しては、それを二束三文に売り飛ばすという悪い癖くせがあつた。彼が何で従兄の家に転ころがり込んでいたのか、その時の私には解らなかつたけれども、今考えると、あるいはそうした乱暴を働らいた結果、しばらく家うちを追ひ出されていたかも知れないと思う。その兄のほかに、まだ庄さんという、こ

れも私の母方の従兄に当る男が、そこいらにぶらぶらしていた。

こういう連中がいつでも一つ所に落ち合つては、寝そべったり、縁^{えん}側^{がわ}へ腰をかけたりして、勝手な出放題を並べていると、時々向うの芸者屋の竹格子^{たけごうし}の窓から、「今日は」^{こんち}などと声をかけられたりする。それをまた待ち受けてでもいるごとくに、連中は「おいちよつとおいで、好いものあるから」とか何とか云つて、女を呼び寄せようとする。芸者の方でも昼間は暇だから、三度に一度は御愛嬌^{ごあいきよう}に遊びに来る。といった風の調子であつた。

私はその頃まだ十七八だつたらう、その上大変な羞恥^{はにかみや}屋で通つていたので、そんな所に居合わしても、何にも云わずに黙つて隅^{すみ}の方に引^{ひっ}込んでばかりいた。それでも私は何かの拍子^{ひょうし}で、これらの人々といつ

しよに、その芸者屋へ遊びに行つて、トランプをした事がある。負けたものは何か奢おごらなければならぬので、私は人の買つた寿司すしや菓子かしをだいぶ食つた。

一週間ほど経たつてから、私はまたこののらくらの兄に連れられて同じ宅へ遊びに行つたら、例の庄さんも席に居合せて話がだいぶはずんだ。その時咲松さきまつという若い芸者が私の顔を見て、「またトランプをしましょう」と云つた。私は小倉こくらの袴はかまを穿はいて四角張つていたが、懷中には一銭の小遣こづかいさえ無かつた。

「僕は銭ぜにがないから厭いやだ」

「好いわ、私わたしが持つてゐるから」

この女はその時眼を病んででもいたのだらう、こういいいい、綺麗きれい

な襦袢じゅばんの袖そででしきりに薄赤くなつた二重瞼ふたえまぶちを擦こすっていた。

その後ご私は「御作おさくが好い御客に引かされた」という噂うわさを、従兄の家いとこうちで聞いた。従兄の家では、この女の事を咲松さきまつと云わないで、常に御作御作と呼んでいたのである。私はその話を聞いた時、心の内でもう御作に会う機会も来こないだろうと考えた。

ところがそれからだいぶ経つて、私が例の達人たつじんといつしよに、芝の山内さんないの勧工場かんこうばへ行つたら、そこでまたぱったり御作に出会つた。こちらの書生姿しやうしに引き易ひかえて、彼女はもう品ひんの好い奥様おくさまに変わっていた。旦那だんなというのも彼女の傍そばについていた。……

私は床屋の亭主の口から出た東家あずまやという芸者屋の名前の奥ひそに潜ひそんでいるこれだけの古い事実を急に思い出したのである。

「あすこにいた御作という女を知ってるかね」と私は亭主に聞いた。

「知ってるどころか、ありゃ私の姪めいでさあ」

「そうかい」

私は驚ろいた。

「それで、今どこにいるのかね」

「御作は亡なくなりましたよ、旦那」

私はまた驚ろいた。

「いつ」

「いつって、もう昔の事になりますよ。たしかあれが二十三の年でしたろう」

「へええ」

「しかも浦塩ウラジオで亡くなっただんです。旦那が領事館に關係のある人だったもんですから、あっちへいっしょに行きましてね。それから間もなくでした、死んだのは」

私は帰って硝子戸ガラスどの中に坐つて、まだ死なずにいるものは、自分とあの床屋の亭主だけのような気がした。

十八

私の座敷へ通されたある若い女が、「どうも自分の周囲まわりがきちんとか片づかないで困りますが、どうしたら宜よろしいものでしょう」と聞いた。

この女はある親戚の宅うちに寄寓きぐうしているので、そこが手狭てげまな上に、子供などが蒼蠅うるさいのだろうと思った私の答は、すこぶる簡単であつた。

「どこかさっぱりした家うちを探して下宿でもしたら好いでしょう」

「いえ部屋の事ではないので、頭の中がきちんと片づかないで困るのです」

私は私の誤解を意識すると同時に、女の意味がまた解らなくなつた。それでもう少し進んだ説明を彼女に求めた。

「外からは何でも頭の中に入つて来ますが、それが心の中心と折合がつかないのです」

「あなたのいう心の中心とはいったいどんなものですか」

「どんなものと云つて、真直まっすぐな直線なのです」

私はこの女の数学に熱心な事を知っていた。けれども心の中心が直線だという意味は無論私に通じなかった。その上中心とははたして何を意味するのか、それもほとんど不可解であつた。女はこう云つた。

「物には何でも中心がございましょう」

「それは眼で見る事ができ、ものさし尺度で計る事のできる物体についての話でしょう。心にも形があるんですか。そんならその中心というものをここへ出して御覧なさい」

女は出せるとも出せないとも云わずに、庭の方を見たり、ひざ膝の上で両手を擦すつたりしていた。

「あなたの直線というのは^{たとえ}比喻じゃありませんか。もし比喻なら、円まると云つても四角と云つても、つまり同じ事になるのでしょう」

「そうかも知れませんが、形や色が始終しじゅう変っているうちに、少しも変らないものが、どうしてもあるのです」

「その変るものと変らないものが、別々だとすると、要するに心が二つある訳になりますか、それで好いのですか。変るものはすなわち変らないものでなければならぬはずじゃありませんか」

こう云った私はまた問題を元に返して女に向った。

「すべて外界のものが頭のなかに入って、すぐ整然と秩序なり段落なりがはつきりするように納まる人は、おそろくないでしょう。失礼ながらあなたの年齢としや教育や学問で、そうき・ち・んと片づけられる訳がありません。もしまたそんな意味でなくって、学問の力を借りずに、徹底的にどさりと納まりをつけたいなら、私のようなものの所へ来ても

駄目^{だめ}です。坊さんの所へでもいらっしやい」

すると女が私の顔を見た。

「私は始めて先生を御見上げ申した時に、先生の心はそういう点で、普通の人以上に整^{とと}のつていらっしやるように思いました」

「そんなはずがありません」

「でも私にはそう見えました。内臓の位置までが調^{ととの}つていらっしやる
としか考えられませんでした」

「もし内臓がそれほど具合よく調節されているなら、こんなに始^{しじゅう}終病
気などはしません」

「私は病気にはなりません」とその時女は突然自分の事を云った。

「それはあなたが私より偉い証^{しょうこ}拠^こです」と私も答えた。

女は蒲団ふとんを滑りすべ下りた。そうして、「どうぞ御身体おからだを御大切ごたいせつに」と云つて歸つて行つた。

十九

私の旧宅は今私の住んでいる所から、四五町奥の馬場下という町にあつた。町とは云い条、その実じつ小さな宿場としか思われなくらい、小供の時の私には、寂れ切さびきつてかつ淋さむしく見えた。もともと馬場下とは高田の馬場の下にあるという意味なのだから、江戸絵図で見ても、朱引内しゅびきうちか朱引外しゅびきうちか分らない辺鄙へんぴな隅すみの方にあつたに違ないのである。それでも内蔵造くらづくりの家が狭い町内に三四軒はあつたろう。坂を上あがる

と、右側に見える近江屋伝兵衛おうみやでんべえという薬種屋やくしゅやなどはその一つであつた。それから坂を下り切つた所に、間口の広い小倉屋こくらやという酒屋もあつた。もつともこの方は倉造りではなかつたけれども、堀部安兵衛ほりべやすべえが高田の馬場で敵を打つ時に、ここへ立ち寄つて、枰酒ますざけを飲んで行つたという履歴のある家柄いえがらであつた。私はその話を小供の時分から覚えていたが、ついぞそこにしまつてあるという噂うわさの安兵衛が口を着けた枰を見たことがなかつた。その代り娘の御北さんおきたの長唄ながうたは何度となく聞いた。私は小供だから上手だか下手だかまるで解らなかつたけれども、私の宅うちの玄関から表へ出る敷石の上に立つて、通りへでも行こうとすると、御北さんの声がそこからよく聞こえたのである。春の日の午過ひるすぎなどに、私はよく恍惚うつとりとした魂を、麗かな光うららかにに包みながら、御北

さんの御浚いおさらを聴くでもなく聴かぬでもなく、ぼんやり私の家の土蔵の白壁に身を靠もたせて、佇立たたずんでいた事がある。その御蔭おかげで私はとうとう「旅の衣ころもは篠懸すずかけの」などという文句をいつの間にか覚えてしまつた。

このほかには棒屋が一軒あつた。それから鍛冶屋かじやも一軒あつた。少し八幡坂はちまんざかの方へ寄つた所には、広い土間を屋根の下に囲い込んだや・つ・ち・や・場ばもあつた。私の家のものは、その主人を、問屋とんやの仙太郎さんと呼んでいた。仙太郎さんは何でも私の父とごく遠い親類つづきになつてゐるんだとか聞いたが、交際つきあいからいうと、まるで疎濶そかつであつた。往来で行き会ふ時だけ、「好い御天気で」などと声をかけるくらいの間柄あいだがらに過ぎなかつたらしく思われる。この仙太郎さんの一人娘が

講釈師の貞水ていすいと好い仲になつて、死ぬの生きるのという騒ぎのあつた事も人間ひとに聞いて覚えてはいるが、纏まとまつた記憶は今頭のどこにも残っていない。小供の私には、それよりか仙太郎さんが高い台の上に腰をかけて、矢立やたてと帳面を持つたまま、「いーやつちやいくら」と威勢の好い声で下にいる大勢の顔を見渡す光景の方がよつぽど面白かつた。下からはまた二十本も三十本もの手を一度に挙あげて、みんな仙太郎さんの方を向きながら、ろ・ん・じ・だ・の・が・れ・ん・だ・の・と・い・う・符・徴・を、罵ののしるように呼び上げるうちに、薑しょうや茄子がなすや唐茄子とうの籠かごが、それらの節太ふしぶとの手で、どしどしどこかへ運び去られるのを見ているのも勇ましかつた。

どんな田舎いなかへ行つてもありがちな豆腐屋とうふやは無論あつた。その豆腐屋

には油の臭においの染しみ込こんだ縄なわ暖簾のれんがかかっていて門口かどぐちを流れる下水の水が京都へでも行つたように綺麗きれいだった。その豆腐屋について曲ると半町ほど先に西閑寺せいかんじという寺の門が小高く見えた。赤く塗られた門うしろの後うしろは、深い竹藪たけやぶで一面に掩おおわれているので、中にどんなものがあるか通りからは全く見えなかったが、その奥でする朝晩の御勤おつとめの鉦かねの音ねは、今でも私の耳に残っている。ことに霧きりの多い秋から木枯こがらしの吹く冬へかけて、カンカンと鳴る西閑寺の鉦の音は、いつでも私の心に悲しくて冷つめたい或物たを叩たたき込むように小さい私の氣分を寒くした。

この豆腐屋の隣に寄席よせが一軒あったのを、私は夢幻ゆめうつのようにまだ覚えていた。こんな場末に人寄場ひとよせばのあらうはずがないというのが、私の記憶に霞かすみをかけるせいだろう、私はそれを思い出すたびに、奇異な感じに打たれながら、不思議そうな眼を見張って、遠い私の過去をふり返るのが常である。

その席亭の主人あるじというのは、町内の鳶頭とびがしらで、時々目暗縞めくらじまの腹掛に赤い筋すじの入った印絆纏しるしばんてんを着て、突っかけ草履ぞうりが何かでよく表を歩いていた。そこにまた御藤さんおふじという娘があつて、その人の容色きりようがよく家のものの口のぼに上った事も、まだ私の記憶を離れずにいる。後のちには養子を貰ったが、それが口髭くちひげを生やした立派な男だったので、私はちよつと驚ろかされた。御藤さんの方でも自慢の養子だという評判が高かった

が、後から聞いて見ると、この人はどこかの区役所の書記だとかいう話であつた。

この養子が来る時分には、もう寄席よせもやめて、しもうた屋やになつていたようであるが、私はその宅うちの軒先にまだ薄暗い看板が淋さむしそうに懸かかつていた頃、よく母から小遣こづかいを貰つてそこへ講釈を聞きに出かけたものである。講釈師の名前はたしか、南麟なんりんとかいった。不思議な事に、この寄席へは南麟よりほかに誰も出なかつたようである。この男の家はどこにあつたか知らないが、どの見当けんとうから歩いて来るにしても、道普請みちぶしんができて、家並いえなみの揃そろつた今から見れば大事業に相違なかつた。その上客の頭数はいつでも十五か二十くらいなのだから、どんなに想像を逞たくましくしても、夢としか考えられないのである。「もうし

もうし花魁^{おいらん}え、と云われて八ツ橋^やなんざますえとふり返る、途端^{とたん}に切り込む刃^{やいば}の光」という変な文句は、私がその時分南麟^{おす}から教わったのか、それとも後^{あと}になつて落語^{はなし}家のやる講釈師の真似^{まね}から覚えたのか、今では混雑してよく分らない。

当時私の家からまず町らしい町へ出ようとするには、どうしても人気がない茶畠^{ちやばたけ}とか、竹藪^{たけやぶ}とかまたは長い田圃^{たんぼ}路^{みち}とかを通り抜けなければならなかった。買物らしい買物はたいてい神楽坂^{かぐらざか}まで出る例になつていたので、そうした必要に馴^ならされた私に、さした苦痛のあるはずもなかったが、それでも矢来^{やらい}の坂を上^{あが}つて酒井様の火^ひの見櫓^{みやぐら}を通り越して寺町へ出ようという、あの五六町の一筋道などになると、昼でも陰森^{いんしん}として、大空が曇つたように始終薄暗^{しじゆう}かった。

あの土手の上に二抱ふたかかえも三抱みかかえもあるという大木が、何本となく並んで、その隙間すきま隙間をまた大きな竹藪ふさで塞いでいたのだから、日の目を拝む時間と云ったら、一日のうちにおそらくただの一刻もなかったのだろう。下町へ行こうと思って、日和下駄ひよりげたなどを穿はいて出ようものなら、きっと非道ひどい目にあうにきまつていた。あすこの霜融しもどけは雨よりも雪よりも恐ろしいもののように私の頭に染み込しこんでいる。

そのくらい不便な所でも火事の虞おそれはあったものと見えて、やっぱり町の曲り角に高い梯子はしごが立っていた。そうしてその上に古い半鐘も型のごとく釣るしてあった。私はこうしたありのままの昔をよく思い出す。その半鐘のすぐ下にあった小さな一膳飯屋いちぜんめしやもおのずと眼先に浮かんで来る。縄暖簾なわのれんの隙間からあたたかそうな煮メにしめの香が煙けむりと共に往来

へ流れ出して、それが夕暮の靄もやに融とけ込んで行く趣おもむきなども忘れる事ができない。私が子規のまだ生きているうちに、「半鐘と並んで高き冬木哉」かなという句を作ったのは、実はこの半鐘の記念のためであつた。

二十一

私の家に関する私の記憶は、惣そうじてこういう風に鄙ひなびている。そうしてどこかに薄ら寒い憐あわれな影を宿している。だから今生き残っている兄から、つい此間こないだ、うちの姉達が芝居に行つた当時の様子を聴いた時には驚ろいたのである。そんな派出はでな暮しをした昔もあつたのかと思つと、私はいよいよ夢のような心持になるよりほかはない。

その頃の芝居小屋はみんな猿若町さるわかちようにあつた。電車も俾くるまもない時分に、高田の馬場の下から浅草の観音様の先まで朝早く行き着こうと云うのだから、たいていの事ではなかったらしい。姉達はみんな夜半よなかに起きて支度したくをした。途中が物騒ぶつそうだというので、用心のため、下男がきつと供ともをして行つたそうである。

彼らは筑土つくどを下りて、柿の木横町から揚場あげばへ出て、かねてその船宿にあつらえておいた屋根船に乗るのである。私は彼らがいかに予期に充みちた心をもつて、のろのろ砲兵工廠ほうへいこうしようの前から御茶の水を通り越して柳橋まで漕こがれつつ行つただろうと想像する。しかも彼らの道中はけつしてそこで終りを告げる訳に行かないのだから、時間に制限をおかなかつたその昔がなおさら回顧の種になる。

大川へ出た船は、流を溯さかのぼつて吾妻橋を通り抜けて、今戸いまどの有明楼ゆうめいろうの傍そばに着けたものだという。姉達はそこから上あがつて芝居茶屋まで歩いて、それからようやく設けの席につくべく、小屋へ送られて行く。設けの席というのは必ず高土間に限られていた。これは彼らの服装なりなり、髪飾かみどまなりが、一般の眼によく着く便利のいい場所なので、派出を好む人達が、争つて手に入れたがるからであつた。

幕の間には役者に随ついてゐる男が、どうぞ楽屋へお遊びにいらつしやいまして云つて案内に来る。すると姉達はこの縮緬ちりめんの模様のある着物の上に袴はかまを穿はいた男のあと後につついて、田之助たのすけとか訥升とつしようとかいうひいき鬚ひいきの役者の部屋へ行つて、扇子せんすに画えなどを描かいて貰つて帰つてくる。これが彼らの見栄みえだつたのだらう。そうしてその見栄は金の力でなければ

ば買えなかつたのである。

歸りには元来もとた路を同じ舟で揚場まで漕ぎ戻す。無要心ぶようじんだからと云つて、下男がまた提灯ちようちんを点けて迎むかえに行く。宅うちへ着くのは今の時計で十二時くらいにはなるのだらう。だから夜半よなかから夜半までかかつて彼らはようやく芝居を見る事ができたのである。……

こんな華麗はなやかな話を聞くと、私ははたしてそれが自分の宅に起つた事か知らんと疑いたくなる。どこか下町の富裕な町家の昔を語られたような気もする。

もつとも私の家も侍分さむらいぶんではなかつた。派出はでな付合つきあいをしなければならぬ名主なぬしという町人であつた。私の知っている父は、禿頭はげあたまの爺さんじいであつたが、若い時分には、一中節いちちゆうぶしを習つたり、馴染なじみの女に縮緬ちりめんの積夜つみや

具ぐをしてやったりしたのだそうである。青山に田地でんちがあつて、そこから上つて来る米だけでも、家のものが食うには不足がなかったとか聞いた。現に今生き残っている三番目の兄などは、その米を舂つく音を始しじ終ゆう聞いたと云っている。私の記憶によると、町内のものがみんなして私の家呼んで、玄関げんかと称となえていた。その時分の私には、どういふ意味か解らなかったが、今考えると、式台のついた厳いかめしい玄関付の家は、町内にたつた一軒しかなかったからだろうと思う。その式台を上つた所に、突棒つくぼうや、袖搦そでがらみや刺股さつまたや、また古ぼけた馬ば上提灯じようなどが、並んで懸かけてあつた昔なら、私でもまだ覚えてゐる。

この二三年来私はたいてい年に一度くらいの割で病気を^{とこ}する。そうして床についてから床を上げるまでに、^{ひとつき}ほぼ一月の^{ひかず}日数を^{つぶ}潰してしま^うう。

私の病気と云えば、いつもきまつた胃の故障なので、いざとなると、絶食療法よりほかに手の着けようがなくなる。医者^{いしや}の命令ばかりか、病気の性質そのものが、私にこの絶食を余儀なくさせるのである。だから病み始めより回復期に向った時の方が、余計^や痩せこけてふらふらする。一カ月以上かかるのもおもにこの衰弱^たが崇^たるからのように思われる。

私の立居^{たちい}が自由になると、黒^{くろ}柘^{わく}のついた摺物^{すりもの}が、時々私の机の上に載せられる。私は運命を苦笑する人のごとく、絹帽^{シルクハット}などを被^{かぶ}つて、葬

式の供に立つ、俵くるまを駆かつて斎場さいじょうへ駈かけつける。死んだ人のうちには、御爺さんも御婆さんもあるが、時には私よりも年齒としが若くつて、平生からその健康を誇まじっていた人も交まじっている。

私は宅へ歸つて机の前に坐つて、人間の寿命は実に不思議なものだ
と考える。多病な私はなぜ生き残っているのだろうかと思つて見る。

あの人はどういう訳で私より先に死んだのだろうかと思う。

私としてこういう黙想ふけに耽ふけるのはむしろ当然だといわなければなら
ない。けれども自分の位地いちや、身体からだや、才能や——すべて己おのれという
もののおり所を忘れがちな人間の一人いちにんとして、私は死なないのが当り
前だと思ひながら暮らしている場合が多い。読経どききょうの間ですら、焼香の
際ですら、死んだ仏のあとに生き残つた、この私という形骸けいがいを、ちつ

とも不思議と心得ずに澄ましている事が常である。

或人が私に告げて、「他の死ぬのは当り前の^{ひと}ように見えますが、自分が死ぬという事だけはとても考えられません」と云った事がある。戦争に出た経験のある男に、「そんなに隊のものが続々^{たお}斃れるのを見ていながら、自分だけは死なないと思つていられますか」と聞いたら、その人は「いられますね。おおかた死ぬまでは死なないと思つてるんでしょう」と答えた。それから大学の理科に關係のある人に、飛行機の話^きを聴かされた時に、こんな問答をした覚えもある。

「ああして始終^{しじゆう}落ちたり死んだりしたら、後から乗るものは怖い^{こわ}だらうね。今度はおれの番だという氣になりそうなものだが、そうでないかしら」

「ところがそうでないと見えます」

「なぜ」

「なぜって、まるで反対の心理状態に支配されるようになるらしいのです。やッぱりあいつは墜落して死んだが、おれは大丈夫だという気になると思えますね」

私も恐らくこういう人の気分で、比較的平気にしていられるのだらう。それもそのはずである。死ぬまでは誰しも生きているのだから。

不思議な事に私の寝ている間には、黒^{くろ}梓^{わく}の通知がほとんど来ない。

去年の秋にも病^な氣^おが癒^あった後^{あと}で、三四人の葬儀に列したのである。その三四人の中に社の佐藤君も這^は入^いっていた。私は佐藤君がある宴会の席で、社から貰^{もら}った銀^{ぎん}盃^{ぱい}を持^もつて来て、私に酒を勧^{すす}めてくれた事を思

い出した。その時彼の踊った変な踊もまだ覚えている。この元気な唄くつき強ような人の葬式とむらいに行った私は、彼が死んで私が生残なまごりっているのを、別段の不思議とも思わずにいる時の方が多い。しかし折々考えると、自分の生きている方が不自然のような心持にもなる。そうして運命がわざと私を愚弄ぐろうするのではないかしらと疑いたくなる。

二十三

今私の住んでいる近所に喜久井町きくいちょうという町がある。これは私の生れた所だから、ほかの人よりもよく知っている。けれども私が家を出て、方々漂浪ひょうろうして帰って来た時には、その喜久井町がだいぶ広がっ

て、いつの間にか根来ねごろの方まで延びていた。

私に縁故の深いこの町の名は、あまり聞き慣れて育ったせいか、ちつとも私の過去を誘い出す懐かしい響を私に与えてくれない。しかし書齋に独り坐ひとつて、頬杖ほおづえを突いたまま、流れを下る舟のように、心を自由に遊ばせておくと、時々私の聯想れんそうが、喜久井町の四字にぱたりと出会ったなり、そこでしばらく低徊ていかいし始める事がある。

この町は江戸と云った昔には、多分存在していなかったものらしい。江戸が東京に改まった時か、それともずっと後のちになってからか、年代はたしかに分らないが、何でも私の父が拵こしらえたものに相違ないのである。

私の家の定紋じようもんが井桁いげたに菊なので、それにちなんだ菊に井戸を使っ

て、喜久井町としたという話は、父自身の口から聴いたのか、または他のものから教おすわったのか、何しろ今でもまだ私の耳に残っている。父は名主なぬしがなくなつてから、一時区長という役を勤めていたので、あるいはそんな自由も利きいたかも知れないが、それを誇ほこりにした彼の虚栄心を、今になつて考えて見ると、厭いやな心持は疾とくに消え去つて、ただ微笑したくなるだけである。

父はまだその上に自宅の前から南へ行く時には是非共登らなければならぬ長い坂に、自分の姓の夏目という名をつけた。不幸にしてこれは喜久井町ほど有名にならずに、ただの坂として残っている。しかしこの間、或人が来て、地図でこの辺の名前を調べたら、夏目坂というのがあつたと云つて話したから、ことによると父の付けた名が今でも

役に立っているのかも知れない。

私が早稲田^{わせだ}に帰って来たのは、東京を出てから何年ぶりになるだろう。私は今の住居^{すまい}に移る前、家^{うち}を探す目的であつたか、また遠足の帰り路であつたか、久しぶりで偶然私の旧家の横へ出た。その時表から二階の古瓦^{ふるがわら}が少し見えたので、まだ生き残っているのかしらと思つたなり、私はそのまま通り過ぎてしまった。

早稲田に移ってから、私はまたその門前を通つて見た。表から覗^{のぞ}くと、何だかもとと変らないような氣もしたが、門には思いも寄らない下宿屋の看板^{かか}が懸^かつていた。私は昔の早稲田田圃^{たんぼ}が見たかつた。しかしそこはもう町になつていた。私は根来^{ねごろ}の茶畠^{ちやばたけ}と竹藪^{たけやぶ}を一目眺^{ひとめ}めたかつた。しかしその痕迹^{こんせき}はどこにも発見する事ができなかつた。多分

この辺だろうと推測した私の見当は、けんとう当っているのか、外はずれているのか、それさえ不明であった。

私は茫然ぼうぜんとして佇立ちよりつした。なぜ私の家だけが過去の残骸ざんがいのごとくに存在しているのだろう。私は心のうちで、早くそれが崩くずれてしまえば好いのにと思った。

「時」は力であつた。去年私が高田の方へ散歩したついでに、何気なくそこを通り過ぎると、私の家は綺麗きれいに取り壊されて、そのあとに新しい下宿屋が建てられつつあつた。その傍そばには質屋もできていた。質屋の前に疎まばらな囲かこいをして、その中に庭木が少し植えてあつた。三本の松は、見る影もなく枝を刈り込まれて、ほとんど畸形児きけいじのようになつていたが、どこか見覚みおぼえのあるような心持を私に起させた。昔むかし

「影参差松三本の月夜かな」と咏ったのは、あるいはこの松の事ではなかったろうかと考えつつ、私はまた家に帰った。

二十四

「そんな所に生い立って、よく今日まで無事にすんだものですね」

「まあどうかこうか無事にやって来ました」

私達の使った無事という言葉は、男女の間に起る恋の波瀾がないという意味で、云わば情事の反対を指したようなものであるが、私の追窮心は簡単なこの一句の答で満足できなかった。

「よく人が云いますね、菓子屋へ奉公すると、いくら甘いものの好きな

男でも、菓子いゃが厭いやになるって、御彼岸おひがんに御萩おはぎなどを拵こしらえているところを宅うちで見ても分るじゃありませんか、拵こしらえるものは、ただ御萩おじゅうを御重おじゅうに詰めるだけで、もうげんなりした顔ををしているくらいだから。

あなたの場合もそんな訳なんですか」

「そういう訳でもないようです。とにかく廿歳はたち少し過ぎまでは平気でいたのですから」

その人はある意味において好男子であつた。

「たといあなたが平気でいても、相手が平気でいない場合がないとも限らないじゃありませんか。そんな時には、どうしたって誘さそわれがちになるのが当り前でしょう」

「今からふり返って見ると、なるほどこういう意味でああいう事をし

たのだとか、あんな事を云ったのだとか、いろいろ思い当る事がないでもありません」

「じゃ全く気がつかずにいたのですね」

「まあそうです。それからこちらで気のついたのも一つありました。しかし私の心はどうしても、その相手に惹ひきつけられる事ができなかったのです」

私はそれが話の終りかと思った。二人の前には正月の膳ぜんが据すえてあった。客は少しも酒を飲まないし、私もほとんど盃さかずきに手を触れなかったから、献酬けんしゅうというものは全くなかった。

「それだけで今日まで経過して来られたのですか」と私は吸物をすすりながら念のために訊きいて見た。すると客は突然こんな話を私にして

聞かせた。

「まだ使用人であつた頃に、ある女と二年ばかり会つていた事があります。相手は無論素人しろウトではないのでした。しかしその女はもういないのです。首を縊くつて死んでしまったのです。年は十九でした。十日ばかり会わないでいるうちに死んでしまったのです。その女にはね、旦那なが二人あつて、双方が意地ずくで、身受の金を競せり上げあにかつたのです。それに双方共老妓を味方にして、こつちへ来い、あつちへ行くなど義理責ぎりぜめにもしたらしいのです。……」

「あなたはそれを救つてやる訳に行かなかつたのですか」

「当時の私は丁稚でうちの少し毛の生はえたようなもので、とてもどうもできないのです」

「しかしその芸妓げいしやはあなたのために死んだのじゃありませんか」

「さあ……。一度に双方の旦那に義理を立てる訳に行かなかったからかも知れませんが。……。しかし私ら二人の間に、どこへも行かないという約束はあつたに違ないのです」

「するとあなたが間接にその女を殺した事になるのかも知れませんか」

「あるいはそうかも知れません」

「あなたは寢覚ねざめが悪ありませんか」

「どうも好くないのです」

元日に込みこ合った私の座敷は、二日になって淋さびしいくらい静かであつた。私はその淋しい春の松の内に、こういう憐あわれな物語りを、そ

の年賀の客から聞いたのである。客は真面目な正直な人だったから、それを話すにも、ほとんど艶っぽい言葉を使わなかった。

二十五

私がまだ千駄木にいた頃の話だから、年数にすると、もうだいぶ古い事になる。

或日私は切通しの方へ散歩した帰りに、本郷四丁目の角へ出る代りに、もう一つ手前の細い通りを北へ曲った。その曲り角にはその頃あった牛屋の傍に、寄席の看板がいつでも懸っていた。

雨の降る日だったので、私は無論傘をさしていた。それが鉄御納戸

の八間はちけんの深張で、上から洩もってくる雫しずくが、自然木じねんぼくの柄えを伝わって、私の手を濡ぬらし始めた。人通りの少ないこの小路こうじは、すべての泥を雨で洗い流したように、足駄あしだの齒はに引ひつ懸かる汚きたないものはほとんどなかった。それでも上を見れば暗く、下を見れば佗わびしかった。始終しじゅう通りつけているせいでもあるが、私の周囲には何一つ私の眼を惹ひくものは見えなかった。そうして私の心はよくこの天気とこの周囲に似ていた。私には私の心を腐蝕ふしょくするような不愉快な塊かたまりが常にあつた。私は陰いん鬱うつな顔をしながら、ぼんやり雨の降る中を歩いていた。

日蔭町ひかげちようの寄席よせの前まで来た私は、突然一台の幌俵ほろぐるまに出会った。私と俵の間には何の隔へだたりもなかったので、私は遠くからその中に乗っている人の女だという事に気がついた。まだセルロイドの窓などのできな

い時分だから、車上の人は遠くからその白い顔を私に見せていたのである。

私の眼にはその白い顔が大変美しく映った。私は雨の中を歩きながらじつとその人の姿に見惚みとれていた。同時にこれは芸者だろうという推察が、ほとんど事実のように、私の心に働らきかけた。すると俤が私の一間ばかり前へ来た時、突然私の見ていた美しい人が、鄭寧ていねいな会釈やくを私にして通り過ぎた。私は微笑に伴なうその挨拶あいさつとともに、相手が、大塚楠緒おおつかのすおさんであつた事に、始めて気がついた。

次に会つたのはそれから幾日いくかめ目だつたらうか、楠緒くすおさんが私に、「この間は失礼しました」と云つたので、私は私のありのままを話す気になった。

「実はどこの美しい方かと思つて見ていました。芸者じゃないかしらとも考えたのです」

その時楠緒さんが何と答えたか、私はたしかに覚えていないけれども、楠緒さんはちつとも顔を赧^{あか}らめなかつた。それから不愉快な表情も見せなかつた。私の言葉をただそのままに受け取つたらしく思われた。

それからずっと経^たつて、ある日楠緒さんがわざわざ早稲田へ訪^{たず}ねて来てくれた事がある。しかるにあいにく私は妻^{さい}と喧嘩^{けんか}をしていた。私は厭^{いや}な顔をしたまま、書斎にじつと坐っていた。楠緒さんは妻と十分ばかり話をして歸つて行つた。

その日はそれですんだが、ほどなく私は西片町へ詫^{あや}まりに出かけ

た。

「実は喧嘩をしていたのです。妻も定めて無愛想でしたらう。私はまた苦々しい顔を見せるのも失礼だと思つて、わざと引込んでいたのです」

これに対する楠緒さんの挨拶も、今では遠い過去になつて、もう呼び出す事のできないほど、記憶の底に沈んでしまった。

楠緒さんが死んだという報知の来たのは、たしか私が胃腸病院にいる頃であつた。死去の広告中に、私の名前を使つて差支ないかと電話で問い合された事などもまだ覚えている。私は病院で「ある程の菊投げ入れよ棺の中」という手向の句を楠緒さんのために咏んだ。それを俳句の好きなある男が嬉しがって、わざわざ私に頼んで、短冊に書か

せて持つて行つたのも、もう昔になつてしまつた。

二十六

益さんますがどうしてそんなに零落おちぶれたものか私には解らない。何しろ私の知っている益さんは郵便脚夫であつた。益さんの弟の庄うちさんも、家を潰つぶして私の所へ転ころがり込んで食客いそくろうになつていたが、これはまだ益さんよりは社会的地位が高かつた。小供の時分本町の鰯屋いわしやへ奉公に行つていた時、浜の西洋人が可愛かわいがつて、外国へ連れて行くと云つたのを断つたのが、今考えると残念だなどと始終話しじゅうしていた。

二人とも私の母方の従兄いとこに当る男だつたから、その縁故で、益さん

おとと

は弟に会うため、また私の父に敬意を表するため、月に一遍ぐらいは、牛込の奥まで煎餅せんべいの袋などを手土産てみやげに持って、よく訪ねて来た。

益さんはその時何でも芝の外れか、または品川はず近くに世帯を持つて、一人暮しの呑気のんきな生活を営んでいたらしいので、宅うちへ来るとよく泊まって行った。たまに帰ろうとすると、兄達が寄つてたかつて、

「帰ると承知しないぞ」などと威嚇おどかしたものである。

当時二番目と三番目の兄は、まだ南校なんこうへ通っていた。南校というのは今の高等商業学校の位置にあつて、そこを卒業すると、開成学校すなわち今日こんにちの大学へ這入はいる組織そしよくになつていたものらしかった。彼らは夜になると、玄関きりに桐の机を並べて、明日あしたの下読したよみをする。下読と云つたところで、今の書生のやるのとはだいふ違つていた。グードリッチ

の英国史といったような本を、一節ぐらいつつ読んで、それからそれを机の上へ伏せて、口の内でも今読んだ通りを暗誦するあんしやうのである。

その下讀が済むと、だんだん益さんが必要になつて来る。庄さんもいつの間にかそこへ顔を出す。一番目の兄も、機嫌きげんの好い時は、わざわざ奥から玄關まで出張でばつて来る。そうしてみんないつしよになつて、益さんに調戲からかい始める。

「益さん、西洋人の所へ手紙を配達する事もあるだろう」

「そりや商売だから厭いやだつて仕方ありません、持って行きますよ」

「益さんは英語ができるのかね」

「英語ができるくらいならこんな真似まねをしちゃいけません」

「しかし郵便ツとか何とか大きな声を出さなくっちゃならないだろ

う」

「そりゃ日本語で間に合いますよ。異人だって、近頃は日本語が解りますもの」

「へええ、向でも何とか云うのかね」

「云いますとも。ペロリの奥さんなんか、あなたよろしいありがとう、ちゃんと日本語で挨拶あいさつをするくらいです」

みんなは益さんをここまでおびき出しておいて、どつと笑うのである。それからまた「益さん何て云うんだって、その奥さんは」と何遍も一つ事を訊きいては、いつまでも笑いの種にしようと巧たくらんでかか
る。益さんもしまいには苦笑いをして、とうとう「あなたよろしい」
をやめにしてしまう。すると今度は「じゃ益さん、野中のなかの一本杉いっぽんすぎを

やって御覧よ」と誰かが云い出す。

「やれったって、そうおいそれとやれるもんじゃありません」

「まあ好いから、おやりよ。いよいよ野中の一本杉の所まで参りますと……」

益さんはそれでもにやにやして応じない。私はとうとう益さんの野中の一本杉というものを聴^きかずにしまった。今考えると、それは何でも講釈^{にんじょうばなし}か人情噺の一節じゃないかしらと思う。

私の成人する頃には益さんももう宅^{うち}へ来なくなつた。おおかた死んだのだらう。生きていれば何か消息^{たより}のあるはずである。しかし死んだにしても、いつ死んだのか私は知らない。

二十七

私は芝居というものに余り親しみが無い。ことに旧劇は解らない。

これは古来からその方面で発達して来た演芸上の約束を知らないの
で、舞台の上に開展かいてんされる特別の世界に、同化する能力が私に欠けて
いるためだとも思う。しかしそればかりではない。私が旧劇を見て、
最も異様に感ずるのは、役者が自然と不自然の間を、どっちつかずに
ぶらぶら歩いている事である。それが私に、中腰ちゆうごしと云ったような落ち
つけない心持を引き起させるのも恐らく理の当然なのだろう。

しかし舞台の上に子供などが出て来て、甲かんの高い声で、憐あわれっぽい
事などを云う時には、いかな私でも知らず知らず眼に涙が滲にじみ出る。

そうしてすぐ、ああ騙だまされたなと後悔する。なぜあんなに安っぽい涙を零こぼしたのだろうと思う。

「どう考えても騙されて泣くのは厭いやだ」と私はある人に告げた。芝居好のその相手は、「それが先生の常態なのでしょう。平生涙を控ひかえ目めにしているのは、かえってあなたのよそゆきじゃありませんか」と注意した。

私はその説に不服だったので、いろいろの方面から向むこうを納得させようとしているうちに、話題がいつか絵画の方に滑すべって行つた。その男はこの間参考品として美術協会に出た若冲じゃくちゆうの御物ぎよぶつを大変に嬉うれしがつて、その評論をどこかの雑誌に載せるとかいう噂うわさであつた。私はまたあの鶏の図がすこぶる気に入らなかつたので、ここでも芝居と同じよ

うな議論が二人の間に起った。

「いったい君に画えを論ずる資格はないはずだ」と私はついに彼を罵倒ばとうした。するとこの一言いちごんが本もとになつて、彼は芸術一元論を主張し出した。彼の主意をかいつまんで云うと、すべての芸術は同じ源みなもとから湧わいて出るのだから、その内の一つさえうんと腹に入れておけば、他は自おのずから解し得られる理窟りくつだというのである。座にいる人のうちで、彼に同意するものも少なくなかった。

「じゃ小説を作れば、自然柔道うまも旨うまくなるかい」と私が笑談じょうだん半分に云った。

「柔道は芸術じゃありませんよ」と相手も笑いながら答えた。

芸術は平等観から出立するのではない。よしそこから出立するにし

ても、差別観さべつかんに入いって始めて、花が咲くのだから、それを本来の昔へ返せば、絵も彫刻も文章も、すっかり無に帰してしまふ。そこに何で共通のものがあるう。たとい有ったにしたところで、実際の役には立たない。彼我共通の具体的なものなどの発見もできるはずがない。

こういうのがその時の私の論旨ろんしであつた。そうしてその論旨は決して充分なものではなかつた。もっと先方の主張を取り入れて、周到な解釈を下くだしてやる余地はいくらでもあつたのである。

しかしその時座にいた一人いちにんが、突然私の議論を引き受けて相手に向い出したので、私も面倒だからついそのままにしておいた。けれども私の代りになったその男というのはだいぶ酔つていた。それで芸術がどうだの、文芸がどうだのと、しきりに弁ずるけれども、あまり要領

を得た事は云わなかった。言葉遣い^{づか}さえ少しへべれけであつた。初めのうちは面白がつて笑っていた人達も、ついには黙つてしまった。

「じゃ絶交しよう」などと酔つた男がしまいに云い出した。私は「絶交するなら外でやってくれ、ここでは迷惑だから」と注意した。

「じゃ外へ出て絶交しようか」と酔つた男が相手に相談を持ちかけたが、相手が動かないので、とうとうそれぎりになつてしまった。

これは今年の元日の出来事である。酔つた男はそれからちよいちよ出来るが、その時の喧嘩^{けんか}については一口も云わない。

ある人が私の家の猫を見て、「これは何代目の猫ですか」と訊いた時、私は何気なく「二代目です」と答えたが、あとで考えると、二代目はもう通り越して、その実三代目になっていた。

初代は宿なしであつたにかかわらず、ある意味からして、だいぶ有名になつたが、それに引きかえて、二代目の生涯は、主人にさえ忘れられるくらい、短命だつた。私は誰がそれをどこから貰つて来たかよく知らない。しかし手の掌に載せれば載せられるような小さい恰好をして、彼がそこいら中這い廻っていた當時を、私はまだ記憶している。この可憐な動物は、ある朝家のものが床を揚げる時、誤つて上から踏み殺してしまった。ぐうという声がしたので、蒲団の下に潜り込んである彼をすぐ引き出して、相当の手当をしたが、もう間に合わない。

かった。彼はそれから一日二日してついに死んでしまった。その後へ
来たのがすなわち真黒な今の猫である。

私はこの黒猫を可愛がっても憎がってもいない。猫の方でも宅中の
そのそ歩き廻るだけで、別に私の傍へ寄りつこうという好意を現わし
た事がない。

ある時彼は台所の戸棚へ這入って、鍋の中へ落ちた。その鍋の中に
は胡麻の油がいっぱいあったので、彼の身体はコスメチックでも塗り
つけたように光り始めた。彼はその光る身体で私の原稿紙の上に寝た
ものだから、油がずっと下まで滲み通って私をずいぶんな目に逢わせ
た。

去年私の病気をする少し前に、彼は突然皮膚病に罹った。顔から額

へかけて、毛がだんだん抜けて来る。それをしきりに爪で搔くものだから、瘡蓋がぼろぼろ落ちて、痕が赤裸になる。私はある日食事中この見苦しい様子を眺めて厭な顔をした。

「ああ瘡蓋を零して、もし小供にでも伝染するといけないから、病院へ連れて行つて早く療治をしてやるがいい」

私は家のもの^{うち}にこういったが、腹の中では、ことによると病気が病気だから全治しまいとも思つた。昔^{むか}し私の知っている西洋人が、ある伯爵から好い犬を貰つて可愛^{かわい}がつていたところ、いつかこんな皮膚病に悩まされ出したので、気の毒だからと云つて、医者に頼んで殺して貰つた事を、私はよく覚えていたのである。

「クロロフォームか何かで殺してやった方が、かえつて苦痛がなくなつ

て仕合せだろう」

私は三四度同じ言葉を繰り返して見たが、猫がまだ私の思う通りにならないうちに、自分の方が病気でどっと寝てしまった。その間私はついに彼を見る機会をもたなかった。自分の苦痛が直接自分を支配するせいか、彼の病気を考える余裕さえ出なかった。

十月に入って、私はようやく起きた。そうして例のごとく黒い彼を見た。すると不思議な事に、彼の醜い赤裸の皮膚にもそのような黒い毛が生えかかっていた。

「おや癒^{なお}るのかしら」

私は退屈な病後の眼を絶えず彼の上に注いでいた。すると私の衰弱がだんだん回復するにつれて、彼の毛もだんだん濃くなって来た。そ

れが平生の通りになると、今度は以前より肥え始めた。

私は自分の病気の経過と彼の病気の経過とを比較して見て、時々そこに何かの因縁いんねんがあるような暗示を受ける。そうしてすぐその後から馬鹿らしいと思つて微笑する。猫の方ではただにやにや鳴くばかりだから、どんな心持でいるのか私にはまるで解らない。

二十九

私は両親の晩年になつてできたいわゆる末すえツ子こである。私を生んだ時、母はこんな年とし齒はをして懷妊するのは面目ないと云つたとかいう話が、今でも折々は繰くり返かえされている。

単にそのためばかりでもあるまいが、私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里にやってしまった。その里というのは、無論私の記憶に残っているはずがないけれども、成人の後のち聞いて見ると、何でも古道具の売買を渡世とせいにしていた貧しい夫婦ものであつたらしい。

私はその道具屋の我楽多がらくたといっしよに、小さい筈はずの中に入れられて、每晚四谷よつやの大通りの夜店に曝さらされていたのである。それがある晩私の姉が何かのついでにそこを通りかかった時見つけて、可哀想かわいそうとも思つたのだろう、懷ふところへ入れて宅うちへ連れて来たが、私はその夜どうしても寝つかずに、とうとう一晩中泣き続けに泣いたとかいうので、姉は大いに父から叱しかられたそうである。

私はいつ頃ごろその里から取り戻されたか知らない。しかしじきまたあ

る家へ養子にやられた。それはたしか私の四つの歳であつたように思う。私は物心のつく八九歳までそこで成長したが、やがて養家に妙なごたごたが起つたため、再び実家へ戻るような仕儀となつた。

浅草から牛込へ遷うつされた私は、生れた家へ帰つたとは気がつかずに、自分の両親をもと通り祖父母とのみ思つていた。そうして相変らず彼らを御爺おじいさん、御婆おばあさんと呼んで毫ごうも怪しまなかつた。向むでも急に今までの習慣を改めるのが変だと思えたものか、私にそう呼ばれながら澄ました顔をしていた。

私は普通の末すえツ子このようにけつして両親から可愛かわいがられなかつた。これは私の性質が素直すなおでなかつたためだの、久しく両親に遠ざかつていたためだの、いろいろの原因から来ていた。とくに父からはむしろ

苛酷^{かこく}に取扱かわれたという記憶がまだ私の頭に残っている。それだのに浅草から牛込へ移された当時の私は、なぜか非常に嬉^{うれ}しかった。そうしてその嬉しさが誰の目にもつくくらいに著るしく外へ現われた。

馬鹿な私は、本当の両親を爺婆^{じいばば}とのみ思い込んで、どのくらいの月日を空^{くう}に暮らしたものだろう、それを訊^きかれるとまるで分らないが、何でも或夜こんな事があつた。

私がひとり座敷に寝ていると、枕元の所で小さな声を出して、しきりに私の名を呼ぶものがある。私は驚ろいて眼を覚^さましたが、周囲^{あたり}が真暗^{まっくら}なので、誰がそこに蹲踞^{うずくま}っているのか、ちよつと判断がつかなかった。けれども私は小供だからただじつとして先方の云う事だけを聞いていた。すると聞いているうちに、それが私の家^{うち}の下女の声であ

る事に気がついた。下女は暗い中で私に耳語みみごすりをするようにこういふのである。――

「あなたが御爺さん御婆さんだと思っていらっしゃる方は、本当はあなたの御父さんおとつと御母さんおつかなのですよ。先刻さつきね、おおかたそのせいであんなにこっちの宅うちが好なんだろう、妙なものだな、と云つて二人で話していらしたのを私が聞いたから、そつとあなたに教えて上げるんですよ。誰にも話しちゃいけませんよ。よござんすか」

私はその時ただ「誰にも云わないよ」と云つたぎりだったが、心の中では大変嬉しかつた。そうしてその嬉しさは事実を教えてくれたからの嬉しさではなくつて、単に下女が私に親切だったからの嬉しさであつた。不思議にも私はそれほど嬉しく思つた下女の名も顔もまるで

忘れてしまった。覚えているのはただその人の親切だけである。

三十

私がこうして書齋に坐すわっていると、来る人の多くが「もう御病氣はすっかり御癒おなほりですか」と尋ねてくれる。私は何度も同じ質問を受けながら、何度も返答に躊躇ちゆうちよした。そうしてその極きよくいつでも同じ言葉を繰り返すくようになった。それは「ええまあどうかこうか生きています」という変な挨拶あいさつに異ことならなかった。

どうかこうか生きている。——私はこの一句を久しい間使用した。しかし使用すること、何だか不穩当ふおんとうな心持がするので、自分でも実

はやめられるならばと思つて考えてみたが、私の健康状態を云い現わすべき適当な言葉は、他^たにどうしても見つからなかった。

ある日T君が来たから、この話をして、癒^{なお}つたとも云えず、癒らないとも云えず、何と答えて好いか分らないと語ったら、T君はすぐ私にこんな返事をした。

「そりや癒つたとは云われませんね。そう時々再発するようじゃ。まあもとの病気の継続なんでしょう」

この継続という言葉聞いた時、私は好い事を教えられたような気がした。それから以後は、「どうかこうか生きています」という挨拶^{あいさつ}をやめて、「病気はまだ継続中です」と改^{あらた}めた。そうしてその継続の意味を説明する場合には、必ず歐洲の大乱^{ひきあい}を引合に出した。

「私はちょうど独^{ドイツ}乙^{れんごうぐん}が聯合軍と戦争をしているように、病氣と戦争をしているのです。今こうやってあなたと対坐していられるのは、天下が太平になったからではないので、塹壕^{ざんこう}の中に這^{うち}入^{はい}つて、病氣と睨^{にら}め^{へん}つくらをしているからです。私の身体^{からだ}は乱世です。いつどんな變^{へん}が起らないとも限りません」

或人は私の説明を聞いて、面白そうにははと笑った。或人は黙っていた。また或人は氣の毒らしい顔をした。

客の歸つたあとで私はまた考えた。——継続中のものはおそらく私の病氣ばかりではないだろう。私の説明を聞いて、笑談^{じょうだん}だと思つて笑う人、解らないで黙っている人、同情の念に驅^かられて氣の毒らしい顔をする人、——すべてこれらの人の心の奥には、私の知らない、また

自分達さえ気のつかない、継続中のものがいくらでも潜^{ひそ}んでいるのではなからうか。もし彼らの胸に響くような大きな音で、それが一度に破裂したら、彼らはたしてどう思うだろう。彼らの記憶はその時もはや彼らに向って何物をも語らないだろう。過去の自覚はとくに消えてしまっているだろう。今と昔とまたその昔の間に何らの因果を認める事のできない彼らは、そういう結果に陥^{おちい}った時、何と自分を解釈して見る気だろう。所詮^{しよせん}我々は自分で夢の間に製^ま造した爆裂弾を、思い思いに抱^{いだ}きながら、一人残らず、死という遠い所へ、談笑しつつ歩いて行くのではなからうか。ただどんなものを抱^だいているのか、他^{ひと}も知らず自分も知らないので、仕合せなんだろう。

私は私の病気が継続であるという事に気がついた時、歐洲の戦争も

おそらくいつの世からかの継続だろうと考えた。けれども、それがどこからどう始まって、どう曲折して行くかの問題になると全く無知識なので、継続という言葉解しない一般の人を、私はかえって羨ましく思っている。

三十一

私がまだ小学校に行っていた時分に、喜^きいちゃんという仲の好朋友達があつた。喜^ないちゃん^{かちよう}は当時中町の叔父^{うち}さんの宅にいたので、そう^{みちのり}道程の近くない私の所からは、毎日会いに行く事が出来悪^{にく}かった。私はおもに自分の方から出かけないで、喜^きいちゃん^{うらや}の来るのを宅で待つ

ていた。喜いちゃんはいくら私が行かないでも、きっと向うから来るにきまっていた。そうしてその来る所は、私の家の長屋を借りて、紙や筆を売る松さんの許もとであつた。

喜いちゃんには父母ちちははがないようだったが、小供の私には、それがいっこう不思議とも思われなかつた。おそらく訊きいて見た事もなかつたろう。したがって喜いちゃんがなぜ松さんの所へ来るのか、その訳さえも知らずにいた。これはずっと後で聞いた話であるが、この喜いちゃんの御父おとつさんというのは、昔むかし銀座の役人か何かをしていた時、贖金にせがねを造つたとかいう嫌疑けんぎを受けて、入牢じゅうろうしたまま死んでしまったのだという。それであとに取り残された細君が、喜いちゃんを先夫せんぷの家へ置いたなり、松さんの所へ再縁したのだから、喜いちゃんが時々生うみ

の母に会いに来るのは当り前の話であつた。

何にも知らない私は、この事情を聞いた時ですら、別段変な感じも起さなかつたくらいだから、喜いちゃんとふざけまわつて遊ぶ頃に、彼の境遇などを考えた事はただの一度もなかつた。

喜いちゃんも私も漢学が好きだったので、解りもしない癖に、よく文章の議論などをして面白がつた。彼はどこから聴いてくるのか、調べてくるのか、よくむずかしい漢籍の名前などを挙げて、私を驚ろかす事が多かつた。

彼はある日私の部屋同様になつてゐる玄関に上り込んで、懐から二冊つづきの書物を出して見せた。それは確に写本であつた。しかも漢文で綴つてあつたように思う。私は喜いちゃんから、その書物を受け

取って、無意味にそこを引^ひつ繰返^{くりかえ}して見ていた。実は何が何だか私にはさっぱり解らなかつたのである。しかし喜いちちゃんは、それを知ってるかなどと露骨な事をいう性質^{たち}ではなかつた。

「これは太田南畝^{おおたなんぼ}の自筆なんだがね。僕の友達がそれを売りたいというので君に見せに来たんだが、買ってやらないか」

私は太田南畝という人を知らなかつた。

「太田南畝^{しよくさんじん}っていったい何だい」

「蜀山人^{しよくさんじん}の事さ。有名な蜀山人さ」

無学な私は蜀山人という名前さえまだ知らなかつた。しかし喜いちちゃんにそう云われて見ると、何だか貴重^きの書物らしい気がした。

「いくらなら売^きるのかい」と訊いて見た。

「五十銭に売りたいと云うんだがね。どうだろう」

私は考えた。そうして何しろ価値^{ねぎ}切つて見るのが上策だと思いついた。

「二十五銭なら買つても好い」

「それじゃ二十五銭でも構わないから、買つてやりたまえ」

喜いちゃんはこう云いつつ私から二十五銭受取つておいて、またしきりにその本の効能を述べ立てた。私には無論その書物が解らないのだから、それほど嬉^{うれ}しくもなかったけれども、何しろ損はしないだろうというだけの満足はあった。私はその夜南畝^{なんぼしゆうげん}莠言——たしかそんな名前だと記憶しているが、それを机の上に載せて寝た。

三十二

翌日あくるひになると、喜いちゃんがまたぶらりとやって来た。

「君昨日きのう買つて貰った本の事だね」

喜いちゃんはそれだけ云つて、私の顔を見ながらぐずぐずしている。私は机の上に載せてあつた書物に眼を注いだ。

「あの本かい。あの本がどうかしたのかい」

「実はあすこの宅うちの阿爺おやじに知れたものだから、阿爺が大変怒つてね。

どうか返して貰つて来てくれって僕に頼むんだよ。僕も一遍君に渡したもんだから厭いやだったけれども仕方がないからまた来たのさ」

「本を取りにかい」

「取りにつて訳でもないけれども、もし君の方で差支さしかえがないなら、返してやってくれないか。何しろ二十五銭じゃ安過ぎるっていうんだから」

この最後の一言いちごんで、私は今まで安く買い得たという満足の裏に、ぼんやり潜ひそんでいた不快、——不善の行為から起る不快——を判然はつきり自覚し始めた。そうして一方では狡猾ずるい私を怒いかると共に、一方では二十五銭で売った先方を怒った。どうしてこの二つの怒りを同時に和やわらげたものだろう。私は苦にがい顔をしてしばらく黙っていた。

私のこの心理状態は、今の私が小供の時の自分を回顧して解剖するのだから、比較的明瞭めいりょうに描き出されるようなものの、その場合の私にはほとんど解らなかった。私さえただ苦い顔をしたという結果だけし

か自覚し得なかつたのだから、相手の喜いちちゃんには無論それ以上解^{わか}るはずがなかつた。括弧^{かっこ}の中でいふべき事かも知れないが、年齢^{とし}を取った今日^{こんにち}でも、私にはよくこんな現象が起つてくる。それでよく他^{ひと}から誤解される。

喜いちちゃんは私の顔を見て、「二十五銭では本当に安過ぎるんだとさ」と云つた。

私はいきなり机の上に載せておいた書物を取つて、喜いちちゃんの前に突き出した。

「じゃ返そう」

「どうも失敬した。何しろ安公^{やすこう}の持つてるものでないんだから仕方がない。阿爺^{おやじ}の宅^{うち}に昔からあつたやつを、そつと売つて小遣^{こづかい}にしようつ

て云うんだからね」

私はぷりぷりして何とも答えなかった。喜いちやんは袂ふところから二十五銭出して私の前へ置きかけたが、私はそれに手を触れようとしなかった。

「その金なら取らないよ」

「なぜ」

「なぜでも取らない」

「そうか。しかしつまらないじゃないか、ただ本だけ返すのは。本を返すくらいなら二十五銭も取りたまいな」

私はたまらなくなつた。

「本は僕のものだよ。いったん買った以上は僕のものにきまつてる

じゃないか」

「そりやそうに違いない。違いないが向の宅むこううちでも困ってるんだから」

「だから返すと云ってるじゃないか。だけど僕は金を取る訳がないんだ」

「そんな解らない事を云わずに、まあ取っておきたまいな」

「僕はやるんだよ。僕の本だけでも、欲しければやろうというんだよ。やるんだから本だけ持てたら好いじゃないか」

「そうかそんなら、そうしよう」

喜いちちゃんは、とうとう本だけ持って帰った。そうして私は何の意味なしに二十五銭の小遣を取られてしまったのである。

世の中に住む人間の一人^{いちにん}として、私は全く孤立して生存する訳に行かない。自然他^{ひと}と交渉の必要がどこからか起ってくる。時候の挨拶^{あいさつ}、用談、それからもつと込み入^こった懸合^{かけあい}——これらから脱却する事は、いかに枯淡な生活を送っている私にもむずかしいのである。

私は何でも他の^{ひと}という事を真^まに受けて、すべて正面から彼らの言語動作を解釈すべきものだろうか。もし私が持つて生れたこの單純な性情に自己を託して顧み^{かえり}ないとすると、時々飛んでもない人から騙^{だま}される事があるだろう。その結果蔭^{かげ}で馬鹿にされたり、冷評^{ひや}かされたりする。極端な場合には、自分の面前でさえ忍ぶべからざる侮辱を受けな

いとも限らない。

それでは他はみな擦れ枯らしの嘔吐ばかりと思つて、始めから相手の言葉に耳も借さず、心も傾けず、或時はその裏面に潜んでいらし、い反対の意味だけを胸に収めて、それで賢い人だと自分を批評し、またそこに安住の地を見出し得るだろうか。そうすると私は人を誤解しないとも限らない。その上恐るべき過失を犯す覚悟を、初手から仮定して、かからなければならぬ。或時は必然の結果として、罪のない他を侮辱するくらいの厚顔を準備しておかなければ、事が困難になる。

もし私の態度をこの両面のどつちかに片づけようとする、私の心にまた一種の苦悶が起る。私は悪い人を信じたくない。それからまた

善い人を少しでも傷きずけたくない。そうして私の前に現あらわれて来る人は、ことごとく悪人でもなければ、またみんな善人とも思えない。すると私の態度も相手しだいでいろいろに変わって行かなければならないのである。

この変化は誰にでも必要で、また誰でも実行している事だろうと思うが、それがはたして相手にぴたりと合って寸分間違のない微妙な特殊な線の上をあぶなげもなく歩いているだろうか。私の大いなる疑問は常にそこに蟠わだかまっている。

私の僻ひがみを別にして、私は過去において、多くの人から馬鹿にされたという苦にがい記憶をもっている。同時に、先方の云う事や為する事を、わざと平たく取らずに、暗あんにその人の品性に恥を搔かかしたと同じような

解釈をした経験もたくさんありはしまいかと思う。

他^{ひと}に対する私の態度はまず今までの私の経験から来る。それから前後の關係と四囲の狀況から出る。最後に、曖昧^{あいまい}な言葉ではあるが、私が天から授かった直覺が何分か働らく。そうして、相手に馬鹿にされたり、また相手を馬鹿にしたり、稀^{まれ}には相手に彼相当な待遇を与えたりしている。

しかし今までの経験というものは、広いようで、その実^{じつ}はなはだ狭い。ある社会の一部分で、何度となく繰り返された経験を、他の一部分へ持って行くと、まるで通用しない事が多い。前後の關係とか四囲の狀況とか云ったところで、千差万別なのだから、その応用の区域が限られているばかりか、その実千差万別に思慮^{めぐ}を廻らさなければ役に

立たなくなる。しかもそれを廻らす時間も、材料も充分給与されていない場合が多い。

それで私はともすると事実あるのだから、またないのだから解らない、極めてあやふやな自分の直覚きわというものを主位に置いて、他を判断しなくなる。そうして私の直覚がはたして当たったか当たらないか、要するに客觀的事実によつて、それを確める機会をもたない事が多い。そこにまた私の疑いしじゅうもやが始終靄げんちぜんのようにかかつて、私の心を苦しめている。

もし世の中に全知全能の神があるならば、私はその神の前にひざま跪ひざまずいて、私に毫髪ごうはつの疑うたがいを挟さむ余地もないほど明らかな直覚を与えて、私をこの苦悶くもんから解脱げだつせしめん事を祈る。でなければ、この不明な私の前に出て来るすべての人を、玲瓏透徹な正直ものに變化して、私とその

人との魂がぴたりと合うような幸福を授けたまわん事を祈る。今の私は馬鹿で人に騙だまされるか、あるいは疑い深くて人を容いれる事ができないか、この両方だけしかないような気がする。不安で、不透明で、不愉快に充みちている。もしそれが生涯しょうがいつづくとするならば、人間とはどんなに不幸なものだろう。

三十四

私が大学にいる頃教えたある文学士が来て、「先生はこの間高等工業で講演をなすったそうですね」というから、「ああやった」と答えると、その男が「何でも解らなかつたようですよ」と教えてくれた。

それまで自分の云った事について、その方面の掛念けねんをまるでもって
いなかった私は、彼の言葉を聞くとひとしく、意外の感に打たれた。

「君はどうしてそんな事を知ってるの」

この疑問に対する彼の説明は簡単であった。親戚だか知人だか知らないが、何しろ彼に関係のある或家うちの青年が、その学校に通つていて、当日私の講演を聴いた結果を、何だか解らないという言葉で彼に告げたのである。

「いったいどんな事を講演なすつたのですか」

私は席上で、彼のためにまたその講演の梗概こうがいを繰くり返かえした。

「別にむずかしいとも思えない事だろう君。どうしてそれが解らないかしら」

「解らないでしょう。どうせ解りやしません」

私には断乎^{だんこ}たるこの返事がいかにも不思議に聞こえた。しかしそれよりもなお強く私の胸を打ったのは、止^よせばよかったという後悔の念であつた。自白すると、私はこの学校から何度となく講演を依頼されて、何度となく断つたのである。だからそれを最後に引き受けた時の私の腹には、どうかしてそこに集まる聴衆に、相当の利益を与えたいという希望があつた。その希望が、「どうせ解りやしません」という簡単な彼の一言^{いちごん}で、みごとに粉碎^{ふんさい}されてしまつて見ると、私はわざわざ浅草まで行く必要がなかったのだと、自分を考えない訳に行かなかつた。

これはもう一二年前の古い話であるが去年の秋またある学校で、ど

うしても講演をやらなければ義理が悪い事になつて、ついにそこへ行つた時、私はふと私を後悔させた前年を思い出した。それに私の論じたその時の題目が、若い聴衆の誤解を招きやすい内容を含んでいたので、私は演壇を下りる間際にこう云つた。――

「多分誤解はないつもりですが、もし私の今御話したうちに、判然しないところがあるなら、どうぞ私宅まで来て下さい。できるだけあなたがたに御納得の行くように説明して上げるつもりですから」

私のこの言葉が、どんな風に反響をもたらすだろうかという予期は、当時の私にはほとんど無かつたように思う。しかしそれから四五日経つて、三人の青年が私の書齋に這入つて来たのは事実である。そのうちの二人は電話で私の都合を聞き合せて。一人は鄭寧な手紙を書

いて、面会の時間を^{こしら}えと注文して来た。

私は快^{こころ}よくそれらの青年に接した。そうして彼らの来意を^{たし}確かめた。一人の方は私の予想通り、私の講演についての筋道の質問であったが、残る二人の方は、案外にも彼らの友人がその家庭に対して採^とるべき方針についての疑義を私に^き訊こうとした。したがってこれは私の講演を、どう実社会に応用して好いかという彼らの目前に^{せま}逼った問題を持って来たのである。

私はこれら三人のために、私の云うべき事を云い、説明すべき事を説明したつもりである。それが彼らにどれほどの利益を与えたか、結果からいうとこの私にも分らない。しかしそれだけにしたところで私には満足なのである。「あなたの講演は解らなかつたそうです」と云

われた時よりも遙^{はるか}に満足なのである。

「この稿が新聞に出た二三日あとで、私は高等工業の学生から四五通の手紙を受取った。その人々はみんな私の講演を聴いたものばかりで、いずれも私がここで述べた失望を打ち消すような事実を、反証として書いて来てくれたのである。だからその手紙はみな好意に充^みちていた。なぜ一学生の云った事を、聴衆全体の意見として速断するかなどという詰問的のものは一つもなかった。それで私はここに一言を附加して、私の不明を謝し、併^{あわ}せて私の誤解を正してくれた人々の親切をありがたく思う旨^{むね}を公けにするのである。」

三十五

私は小供の時分よく日本橋の瀬戸物町せとものちようにある伊勢本いせもとという寄席よせへ講釈を聴きに行った。今の三越の向側むこうがわにいつでも昼席の看板がかかつていて、その角かどを曲ると、寄席はつい小半町行くか行かない右手にあつたのである。

この席は夜になると、色物いろものだけしかかけないので、私は昼よりほかに足を踏み込んだ事がなかったけれども、席数からいうと一番多く通つた所のように思われる。当時私のいた家は無論高田の馬場の下ではなかった。しかしいくら地理の便が好かつたからと云つて、どうしてあんなに講釈を聴きに行く時間が私にあつたものか、今考えるとむ

しろ不思議なくらいである。

これも今からふり返って遠い過去を眺めるせいでもあろうが、そこは寄席としてはむしろ上品な気分を客に起させるようにできていた。

こうぞ みぎわき ちようばちうし

しきり

高座の右側には帳場格子のような仕切を二方に立て廻して、その中に

じようれん

定連の席が設けてあった。それから高座の後が縁側で、その先がまた

なな

いげた

庭になっていた。庭には梅の古木が斜めに井桁の上に突き出たりし

て、窮屈な感じのしないほどの大空が、縁から仰がれるくらいに余分の地面を取り込んでいた。その庭を東に受けて離れ座敷のような建物も見えた。

帳場格子のうちにいる連中は、時間が余って使い切れない有福な人達なのだから、みんな相応な服装なりをして、時々吞気のんきそうに袂たもとから毛拔けぬき

などを出して根気よく鼻毛を抜いていた。そんな長閑な日^{のどか}には、庭の梅の樹^きに鶯^{うぐいす}が来て啼^なくような気持もした。

中入^{なかいり}になると、菓子^なを箱入のまま茶を売る男が客の間へ配って歩くのがこの席の習慣になっていた。箱は浅い長方形のもので、まず誰でも欲しいと思う人の手の届く所に一つと云った風に都合よく置かれるのである。菓子の数は一箱に十ぐらいの割だったかと思うが、それを食べただけ食べて、後からその代価を箱の中に入れるのが無言の規約になっていた。私はその頃この習慣を珍らしいもののよう^{おうよう}に興がって眺めていたが、今となって見ると、こうした鷹揚^{のんき}で呑気な気分は、どこ^{ひとよせば}の人寄場へ行つても、もう味わう事ができまいと思うと、それがまた何となく懐^{なつか}しい。

私はそんなおつとりと物寂びた空気の中で、古めかしい講釈といふ

ものをいろいろの人から聴いたのである。その中には、す・と・と・こ・の・

ん・の・ん、ず・い・ず・い、などという妙な言葉を使う男もいた。これは田辺

南竜なんりゅう

と云つて、もとはどこかの下足番であつたとかいう話である。そ

のす・と・と・こ・の・ん・の・ん、ず・い・ず・い、ははなはだ有名なものであつたが、

その意味を理解するものは一人もなかった。彼はただそれを軍勢の押し寄せる形容詞として用いていたらしいのである。

この南竜はとつくの昔に死んでしまった。そのほかのものもたいていは死んでしまった。その後の様子ごをまるで知らない私には、その時分私を喜ばせてくれた人のうちで生きているものがはたして何人あるのだから全く分らなかった。

ところがいつか美音会の忘年会のあった時、その番組を見たら、吉原の幫間たいこまちの茶番だの何だのが列ならべて書いてあるうちに、私はたった一人の当時の旧友を見出した。私は新富座へ行つて、その人を見た。またその声を聞いた。そうして彼の顔も咽喉のども昔とちつとも變つていないのに驚ろいた。彼の講釈も全く昔の通りであつた。進歩もしない代りに、退歩もしていなかつた。廿世紀のこの急劇な變化を、自分と自分の周囲に恐ろしく意識しつつあつた私は、彼の前に坐りながら、絶えず彼と私とを、心のうちで比較して一種の默想に耽ふけっていた。

彼というのは馬琴ばきんの事で、昔伊勢本いせもとで南竜の中入前をつとめていた頃には、琴凌きんりょうと呼ばれた若手だったのである。

三十六

私の長兄はまだ大学とまらない前の開成校かいせいこうにいたのだが、肺わづらを患わづらつて途中で退学してしまった。私とはだいぶん年齒としが違ちがうので、兄弟としての親しみよりも、大人おとな対小供としての関係の方が、深く私の頭に浸しみ込こんでいる。ことに怒おこられた時はそうした感じが強く私を刺戟しげきしたように思う。

兄は色の白い鼻筋の通った美しい男であつた。しかし顔だちから云つても、表情から見ても、どこかに峻けわしい相そうを具そえていて、むやみに近寄れないと云つた風の逼せまつた心持を他ひとに与よへた。

兄の在学中には、まだ地方から出て来た貢進生こうしんせいなどのいる頃だつた

ので、今の青年には想像のできないような気風が校内のそこここに残っていたらしい。兄は或上級生に艶書ふみをつけられたと云って、私に話した事がある。その上級生というのは、兄などよりもずっと年齒上としうえの男であつたらしい。こんな習慣の行なわれない東京で育つた彼は、はたしてその文をどう始末したものだろう。兄はそれ以後学校の風呂でその男と顔を見合わせるたびに、きまりの悪い思をして困つたと云つていた。

学校を出た頃の彼は、非常に四角四面で、始終堅苦しじゆうしく構えていたから、父や母も多少彼に気をおく様子が見えた。その上病気のせいでもあるうが、常に陰気臭い顔をして、宅うちにばかり引込ひっこんでいた。

それがいつとなく融とけて来て、人柄ひとがらが自ずと柔らかなになつたと思う

と、彼はよく古渡唐棧こわたりとうざんの着物に角帯かくおびなどを締め、夕方から宅を外に
し始めた。時々は紫色で亀甲型を一面に摺すった亀清かめせいの団扇うちわなどが茶の
間に放ほうり出だされるようになった。それだけならまだ好いが、彼は長火ながひ
鉢ばちの前へ坐すわったまま、しきりに仮色こわいろを遣つかい出した。しかし宅のものは
別段それに頓着とんじゃくする様子も見えなかった。私は無論平氣であつた。仮
色いろと同時に藤八拳とうはちけんも始まつた。しかしこの方は相手ほうが要いるので、そう
毎晩は繰り返されなかったが、何しろ変に無器用な手を上げたり下げ
たりして、熱心にやっていた。相手はおもに三番目の兄が勤めていた
ようである。私は真面目まじめな顔をして、ただ傍観ぼうかんしているに過ぎなかつ
た。

この兄はとうとう肺病で死んでしまった。死んだのはたしか明治二

十年だと覚えている。すると葬式も済み、待夜たいやも済んで、まずひとかたづき一片付
というところへ一人の女が尋ねて来た。三番目の兄が出て応接して見
ると、その女は彼にこんな事を訊きいた。

「兄さんは死ぬまで、奥さんを御持ちになりやしますまいね」

兄は病氣のため、生涯しょうがい妻帯しなかった。

「いいえしまいまで独身で暮らしていました」

「それを聞いてやっと安心しました。妾わたくしのようなものは、どうせ旦那だんな
がなくなつちや生きて行かないから、仕方がありませんけれども、：

…」

兄の遺骨の埋められた寺の名を教おすわつて帰つて行つたこの女は、わ
ざわざ甲州から出て来たのであるが、元柳橋の芸者をしている頃、兄

と関係があつたのだという話を、私はその時始めて聞いた。

私は時々この女に会つて兄の事などを物語つて見たい気がしないで
もない。しかし会つたら定めし御婆さんおばあになつて、昔とはまるで違つ
た顔をしていはしまいかと考える。そうしてその心もその顔同様に皺しわ
が寄つて、からからに乾いていはしまいかとも考える。もしそうだと
すると、彼女が今になつて兄の弟の私に会うのは、彼女にとってか
えつて辛いつら悲しい事かも知れない。

三十七

私は母の記念のためにここで何か書いておきたいと思うが、あいに

く私の知っている母は、私の頭に大した材料を遺^{のこ}して行つてくれなかった。

母の名は千枝^{ちえ}といった。私は今でもこの千枝という言葉^{なつ}を懐かしいものの一つに数えている。だから私にはそれがただ私の母だけの名前^なで、けっしてほかの女の名前であつてはならないような気がする。幸いに私はまだ母以外の千枝という女に出会つた事がない。

母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼び起す彼女の幻像は、記憶の糸をいくら辿^{たど}つて行つても、御婆さんに見え^る。晩年に生れた私には、母の水々しい姿を覚えていた特権がついに与えられずにしまつたのである。

私の知っている母は、常に大きな眼鏡^{めがね}をかけて裁縫^{しご}をしていた。そ

の眼鏡は鉄縁の古風なもので、球の大きさが直径二寸以上もあつたように思われる。母はそれをかけたまま、すこし顎を襟元へ引きつけながら、私をじつと見る事がしばしばあつたが、老眼の性質を知らないその頃の私には、それがただ彼女の癖とのみ考えられた。私はこの眼鏡と共に、いつでも母の背景になつていた一間の襖を想い出す。古びた張交の中に、生死事大無常迅速云々と書いた石摺なども鮮やかに眼に浮んで来る。

夏になると母は始終紺無地の紹の帷子を着て、幅の狭い黒襦子の帯を締めていた。不思議な事に、私の記憶に残っている母の姿は、いつでもこの真夏の服装で頭の中に現われるだけなので、それから紺無地の紹の着物と幅の狭い黒襦子の帯を取り除くと、後に残るものはただ

彼女の顔ばかりになる。母がかつて縁鼻^{えんばな}へ出て、兄と碁^ごを打っていた様子などは、彼ら二人を組み合わせた図柄^{ずがら}として、私の胸に収めてある唯一^{ゆいいつ}の記念^{かたみ}なのだが、そこでも彼女はやはり同じ帷子^{かたびら}を着て、同じ帯^しを締めて坐っているのである。

私はついぞ母の里へ伴^つれて行かれた覚^{おぼえ}がないので、長い間母がどこから嫁に來たのか知らずに暮らしていた。自分から求めて訊^ききたがるような好奇心はさらになかった。それでその点もやはりぼんやり霞^{かす}んで見えるよりほかに仕方がないのだが、母が四^よツ谷^{やおおぼんまち}大番町で生れたという話だけは確^{たし}かに聞いていた。宅^{うち}は質屋であつたらしい。蔵^{くら}が幾^{いく}戸^と前^{まえ}とかあつたのだと、かつて人から教えられたようにも思うが、何しろその大番町という所を、この年になるまで今だに通つた事のない私

のことだから、そんな細かな点はまるで忘れてしまった。たといそれが事実であつたにせよ、私の今もっている母の記念のなかに蔵屋敷などはけつして現われて来ないのである。おおかたその頃にはもう潰れてしまつたのだらう。

母が父の所へ嫁にくるまで御殿奉公をしていたという話もおぼろげに覚えてゐるが、どこの大名の屋敷へ上つて、どのくらい長く勤めていたものか、御殿奉公の性質さえよく弁えない今の私には、ただ淡い薫を残して消えた香のようなもので、ほとんどとりとめようのない事実である。

しかしそう云えば、私は錦絵に描いた御殿女中の羽織つてゐるような華美な総模様の着物を宅の蔵の中で見た事がある。紅絹裏を付けた

その着物の表には、桜だか梅だかが一面に染め出されて、ところどころに金糸や銀糸の刺繡ぬいも交まじっていた。これは恐らく当時の裃かいどろとかいうものなのだろう。しかし母がそれを打ち掛けた姿は、今想像してもまるで眼に浮かばない。私の知っている母は、常に大きな老眼鏡をかけた御婆さんであつたから。

それのみか私はこの美しい裃ごこがいまきがその後小搔卷に仕立直されて、その頃宅にできた病人の上に載せられたのを見たくらいだから。

三十八

私が大学で教おすわつたある西洋人が日本を去る時、私は何か餞別せんべつを贈

ろうと思つて、宅の蔵から高時絵の緋ひの房ふさの付いた美しい文箱ふばこを取り出して来た事も、もう古い昔である。それを父の前へ持つて行つて貰い受けた時の私は、全く何の氣もつかなかつたが、今こうして筆を執とつて見ると、その文箱も小搔卷おもかげこまやに仕立直された紅絹裏の裨襠へどう同様に、若い時分の母の面影おもかげを濃こまやかに宿しているように思われてならない。母は生涯しょうがい父から着物を拵こしらえて貰つた事がないという話だが、はたして拵こしらえて貰わないでもすむくらいな支度したくをして来たものだろうか。私の心に映るあの紺無地こんむじの紹ろの帷子かたびらも、幅の狭い黒繻子くろじゆすの帶も、やはり嫁に來た時からすでに簞笥たんすの中にあつたものなのだろうか。私は再び母に會つて、万事をことごとく口ずから訊きいて見たい。

悪戯いたずらで強情な私は、けつして世間の末すえツ子このように母から甘く取扱

かわれなかった。それでも宅中^{うちじゅう}で一番私を可愛^{かわい}がつてくれたものは母だという強い親しみの心が、母に対する私の記憶^{うち}の中には、いつでも籠^{こも}っている。愛憎を別にして考えて見ても、母はたしかに品位のある床^{ゆか}しい婦人に違^{ちが}なかつた。そうして父よりも賢^{かし}こそうに誰の目にも見え^いた。気むずかしい兄も母だけには畏敬^{いけい}の念を抱^{いだ}いていた。

「御母^{おつか}さんは何にも云わないけれども、どこかに怖^{こわ}いところがある」

私は母を評した兄のこの言葉を、暗い遠くの方から明らかに引張出^{ひっぱりだ}してくる事が今でもできる。しかしそれは水に融^とけて流れかかった字体を、きつとなつてやつと元の形に返したような際^{きわ}どい私の記憶の断片に過ぎない。そのほかの事になると、私の母はすべて私にとって夢である。途切^{とぎ}れ途切^{とぎ}れに残っている彼女の面影^{おもかげ}をいくら丹念に拾い集

めても、母の全体はとても髣髴する訳に行かない。その途切途切に残っている昔さえ、半ば以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは掴めない。

或時私は二階へ上つて、たった一人で、昼寝をした事がある。その頃の私は昼寝をすると、よく変なものに襲われがちであつた。私の親指が見る間に大きくなつて、いつまで経つても留らなかつたり、あるいは仰向に眺めている天井がだんだん上から下りて来て、私の胸を抑えついたり、または眼を開いて普段と変らない周囲を現に見ているのに、身体だけが睡魔の擒となつて、いくらもがいても、手足を動かす事ができなかつたり、後で考えてさえ、夢だか正気だか訳の分らない場合が多かつた。そうしてその時も私はこの変なものに襲われたので

ある。

私はいつどこで犯した罪か知らないが、何しろ自分の所有でない金銭を多額に消費してしまった。それを何の目的で何に遣^{つか}ったのか、その辺も明瞭^{めいりょう}でないけれども、小供の私にはとても償^{つぐな}う訳に行かないので、気の狭い私は寝ながら大変苦しみ出した。そうしてしまいに大きな声を揚^あげて下にいる母を呼んだのである。

二階の梯子段^{はしごだん}は、母の大眼鏡と離す事のできない、生死事大無常迅速^{そく}云々と書いた石摺^{いしずり}の張交^{はりまぜ}にしてある襖^{ふすま}の、すぐ後^{うしろ}についているので、母は私の声を聞きつけると、すぐ二階へ上って来てくれた。私はそこに立って私を眺めている母に、私の苦しみを話して、どうかして下さいと頼んだ。母はその時微笑しながら、「心配しないで好い

よ。御母^{おつか}さんがいくらでも御金を出して上げるから」と云ってくれた。私は大変^{うれ}嬉しかった。それで安心してまたすやすや寝てしまった。

私はこの出来事が、全部夢なのか、または半分だけ本当なのか、今でも疑っている。しかしどうしても私は実際大きな声を出して母に救いを求め、母はまた実際の姿を現わして私に慰藉^{いしや}の言葉を与えてくれたとしか考えられない。そうしてその時の母の服装^{なり}は、いつも私の眼に映る通り、やはり紺無^{こんむじ}地の紹^ろの帷子^{かたびら}に幅の狭い黒^{くろ}繻子^{じゆす}の帯だったのである。

今日は日曜なので、小供が学校へ行かないから、下女も気を許したものと見えて、いつもより遅く起きたようである。それでも私の床を離れたのは七時十五分過であつた。顔を洗つてから、例の通り焼^{トースト}麵^ト麩^トと牛乳と半熟の鶏^{たまご}卵^ゴを食べて、廁^{かわや}に上ろうとすると、あいにく肥^{こいとり}取^{トリ}が来ているので、私はしばらく出た事のない裏庭の方へ歩を移した。すると植木屋が物置の中で何か片づけものをしていた。不要の炭俵を重ねた下から威勢の好い火が燃えあがる周圍に、女の子が三人ばかり心持よさそうに煖^{たきび}を取っている様子が私の注意を惹^ひいた。

「そんなに焚^{たき}火に当ると顔が真黒になるよ」と云つたら、末の子が、「いやあーだ」と答えた。私は石垣の上から遠くに見える屋^や根^ね瓦^がの融^とけつくした霜^{しも}に濡^ぬれて、朝日にきらつく色を眺めたあと、また家^{うち}の中

へ引き返した。

親類の子が来て掃除そうじをしている書斎の整頓するのを待つて、私は机を縁側えんがわに持ち出した。そこで日当りの好い欄干らんかんに身を靠もたせたり、頬ほお杖づえを突いて考えたり、またしばらくはじっと動かずにただ魂を自由に遊ばせておいてみたりした。

軽い風が時々鉢植はちうえの九花蘭きゅうからんの長い葉を動かしてきた。庭木の中で鶯うぐいすが折々下手な囀りさえずを聴かせた。毎日硝子戸ガラスどの中に坐すわっていた私は、まだ冬だ冬だと思っっているうちに、春はいつしか私の心を蕩揺とうようし始めたのである。

私の冥想めいそうはいつまで坐すわっていても結晶しなかった。筆をとって書こうとすれば、書く種は無尽蔵にあるような心持もするし、あれにしよ

うか、これにしようかと迷い出すと、もう何を書いてもつまらないのだという呑気のんきな考も起ってきた。しばらくそこで佇たずんでいるうちに、今度は今まで書いた事が全く無意味のように思われ出した。なぜあんなものを書いたのだろうという矛盾が私を嘲弄ちやうろうし始めた。ありがたい事に私の神経は静まっていた。この嘲弄の上に乘ってふわふわと高い冥想めいそうの領分のぼに上って行くのが自分には大変な愉快になった。自分の馬鹿な性質を、雲の上から見下みおろして笑いたくなくなった私は、自分自分を軽蔑けいべつする気分けいべつに揺られながら、摇篮ようらんの中で眠ねむる小供に過ぎなかった。

私は今まで他ひとの事と私の事をごちゃごちゃに書いた。他の事を書くときには、なるべく相手の迷惑にならないようにとの掛念けねんがあつた。

私の身の上を語る時分には、かえって比較的自由な空気の中に呼吸する事ができた。それでも私はまだ私に対して全く色気を取り除き得る程度に達していなかった。嘘^{うそ}を吐^ついて世間を欺^{あざむ}くほどの銜^{げんき}気がないにしても、もっと卑^{いや}しい所、もっと悪い所、もっと面目を失するような自分の欠点を、つい発表しずにした。聖オーガスチンの懺悔^{ざんげ}、ルソーの懺悔、オピウムイーターの懺悔、——それをいくら辿^{たど}って行つても、本当の事実は人間の力で叙述できるはずがないと誰かが云った事がある。まして私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は、——もしそれを罪と云い得るならば、——すこぶる明るいところからばかり写されていただろう。そこに或人は一種の不快を感じずるかも知れない。しかし私自身は今その不快の上に跨^{また}がって、一般の人類をひろく

見渡しながら微笑しているのである。今までつまらない事を書いた自分を、同じ眼で見渡し、あたかもそれが他人であつたかの感を抱^{いだ}きつつ、やはり微笑しているのである。

まだ鶯^{うぐいす}が庭で時々鳴く。春風が折々思い出したように九花蘭^{きゅうからん}の葉を揺^{うご}かしに来る。猫がどこかで痛^{いた}く噛^かまれた米噛^{こめかみ}を日に曝^{さら}して、あたにかそうに眠っている。先刻^{さつき}まで庭で護謄^{ゴムふうせん}風船^あを揚げて騒いでいた小供達は、みんな連れ立って活動写真へ行ってしまった。家も心もひっそりとしたうちに、私は硝子戸^{ガラスど}を開け放って、静かな春の光に包まれながら、恍惚^{うつとり}とこの稿を書き終るのである。そうした後で、私はちよつと肱^{ひじ}を曲げて、この縁側^{えんがわ}に一眠り眠るつもりである。

(二月十四日)

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
